

那珂 28

那珂遺跡群第70・74次発掘調査報告

2001

福岡市教育委員会

序

玄界灘に面して広がる福岡市には豊かな歴史と自然が多く残されており、これを後世に伝えていくことは現代に生きる我々の重要な務めであります。

福岡市教育委員会では近年の開発事業の増加に伴い、やむを得ず失われていく遺跡の記録保存に努めているところであります。

本報告による那珂遺跡群第70次・第74次調査では、弥生時代から古代にかけての集落遺跡を調査し、多くの貴重な成果をあげることができました。

本書が文化財保護へのご理解と認識を深める一助となり、また研究資料としても活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から本書の刊行に至るまで、費用負担をはじめとする御協力を賜りました吉村幸治様、廣田一孝様をはじめ多くの方々のご協力とご理解に対し、心からの謝意を表します。

平成13年3月30日

福岡市教育委員会
教育長 生田 征生

本文目次

| | |
|------------|-------|
| 第70次調査 | 榎本義嗣 |
| 第一章 はじめに | 1 |
| 1. 調査に至る経緯 | 1 |
| 2. 調査体制 | 1 |
| 第二章 発掘の記録 | 4 |
| 1. 調査の概要 | 4 |
| 2. 遺構と遺物 | 5 |
| 第三章 まとめ | 22 |
| 第74次調査 | 本田浩二郎 |
| 第一章 はじめに | 31 |
| 1. 調査に至る経緯 | 31 |
| 2. 調査体制 | 31 |
| 第二章 発掘の記録 | 32 |
| 1. 調査の概要 | 32 |
| 2. 遺構と遺物 | 35 |
| 第三章 まとめ | 54 |

那珂遺跡群第70次調査



作業風景

2001
福岡市教育委員会

例　　言

1. 本書は福岡市教育委員会が共同住宅建設に伴い、博多区竹下5丁目500番地において平成11(1999)年度に発掘調査を実施した那珂遺跡群第70次調査の報告書である。
2. 本書に掲載した遺構実測図の作成は榎本義嗣が行った。
3. 本書に掲載した遺物実測図の作成は榎本、上田龍児(福岡大学学生)、山元真美子(別府大学学生)、渡辺誠(九州大学学生)が行なった。
4. 本書に掲載した遺構および遺物の写真撮影は榎本が行った。
5. 本書に掲載した挿図の製図は榎本、星野恵美、渡辺が行った。
6. 本書に掲載した方位は座標北で、真北より $0^{\circ} 18'$ 西偏する。なお、本文中の遺構主軸方位の記述にあたっては磁北(MN: 真北より $6^{\circ} 18'$ 西偏)を用いた。
7. 本書のFig. 1 およびFig. 2 に記した座標は国土調査法第Ⅱ座標系に換っている。
8. 遺構の呼称は掘立柱建物をSB、竪穴住居をSC、土坑をSK、井戸をSE、溝をSD、方形周溝墓はか壙葬関連遺構をSX、ピットをSPと略号化した。
9. 遺物番号は通し番号とし、挿図中と図版中の遺物番号は一致する。
10. 本書に関わる記録・遺物等の資料は福岡市埋蔵文化財センターに保管される予定である。
11. 本書の執筆は榎本が行った。

第一章 はじめに

1. 調査にいたる経緯

平成10(1998)年12月8日、吉村幸治氏より福岡市教育委員会宛てに博多区竹下5丁目500番地(面積:564m²)における共同住宅建設に伴う埋蔵文化財事前審査申請書が提出された(事前審査番号:10-2-453)。これを受けた教育委員会埋蔵文化財課では申請地が周知の埋蔵文化財包蔵地である那珂遺跡群(分布地図番号:塙原38-0085、遺跡略号:NAK)に含まれていることから平成11(1999)年1月25日に試掘調査を実施し、表土直下において遺構を確認した。この試掘調査成果をもとに両者で協議を行なった結果、申請地内の共同住宅建物部分306m²については建築工事に伴い遺構の破壊が回避できないため、その箇所を対象とした記録保存のための本調査を実施することになった。その後、委託契約を締結し、平成11年4月より発掘調査(調査番号:9906)、翌平成12(2000)年度に資料整理・調査報告書作成を行なうこととした。

2. 調査体制

調査委託:吉村 幸治

調査主体:福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財課

調査総括:埋蔵文化財課長 山崎純男

同課調査第2係長 力武卓治

調査庶務:文化財修復課 谷口真由美(前任) 御手洗清(現任)

事前審査:同課事前審査係長 田中壽夫

同係主任文化財主事 杉山富雄(前任) 大庭康時(現任)

同係文化財主事 歴山洋(前任) 加藤隆也(現任)

調査担当:同課調査第2係文化財主事 榎木義嗣

調査作業:岩佐亘 金子國雄 熊本義徳 小林義徳 坂田武 渋谷博之 関哲也 米倉國弘

石橋テル子 金子澄子 唐島栄子 小林スエ子 酒井康恵 杉村百合子 汗美佐江

水松トミ子

整理作業:龟井律子 西島信枝 松尾真澄

| | | | | | |
|-------|-----------------------|--------|-------------------|----------|-------------------|
| 調査番号 | 9906 | 遺跡略号 | NAK | 分布地図番号 | 塙原38-0085 |
| 調査地地籍 | 福岡市博多区竹下5丁目500番地 | | 事前審査番号 | 10-2-453 | |
| 申請地面積 | 564m ² | 調査対象面積 | 309m ² | 調査実施面積 | 339m ² |
| 調査期間 | 平成11(1999)年4月13~5月31日 | | | | |

なお、発掘調査から報告書作成に至るまで吉村幸治氏、照栄建設株式会社をはじめとして関係者の皆様には多大なご協力とご理解を頂きました。ここに記して感謝の意を表します。

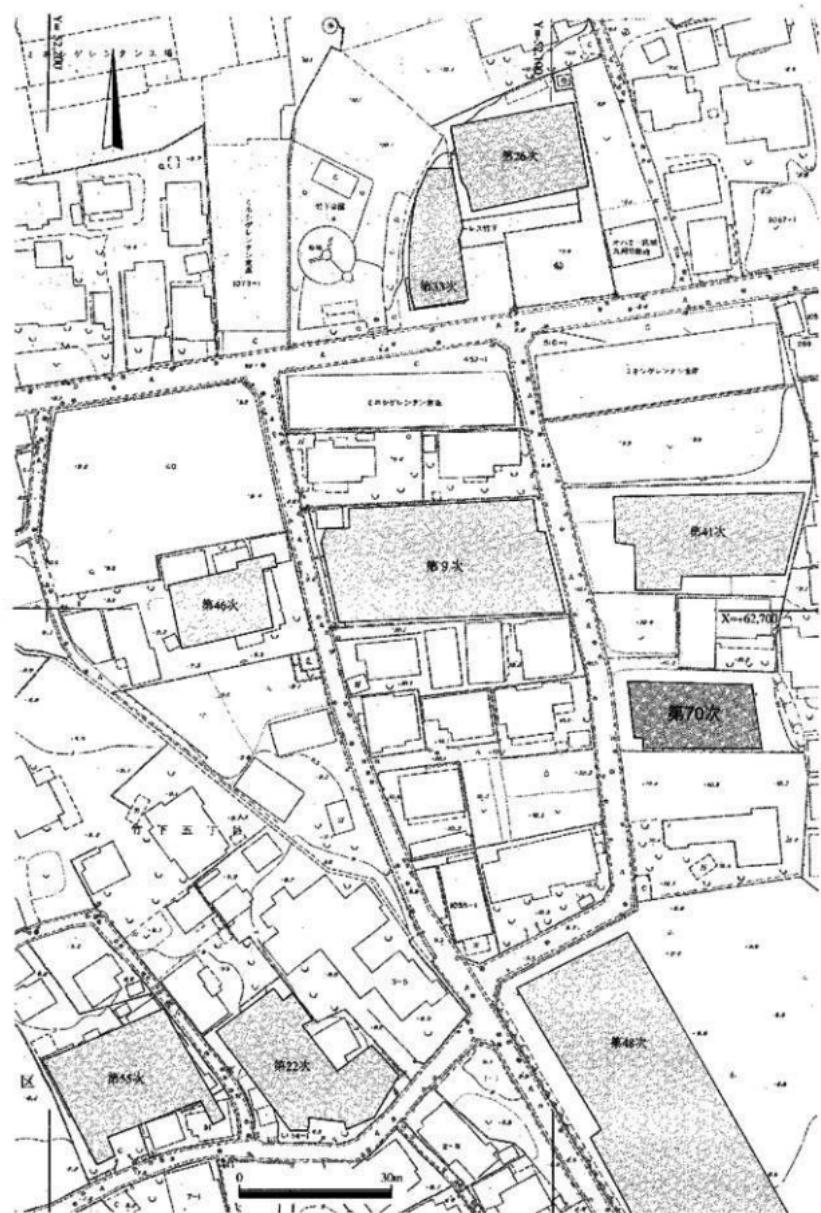
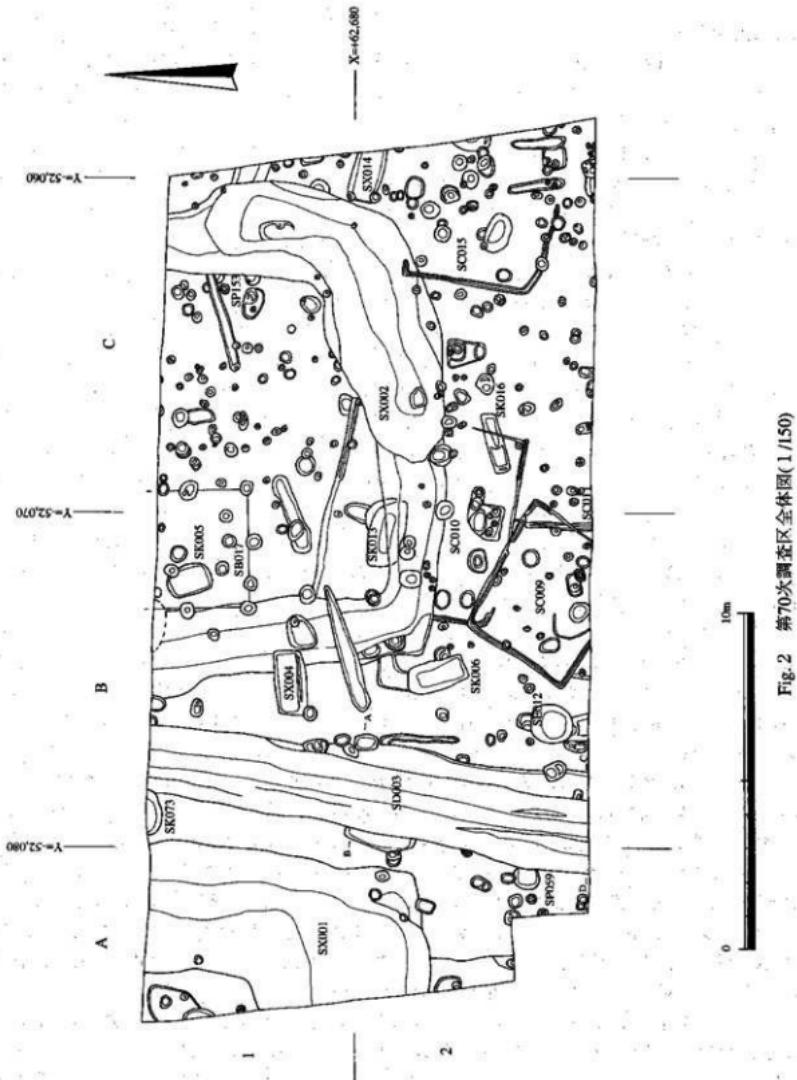


Fig. 1 第70次調査区位置図(1/1,000)



第二章 発掘調査の記録

1. 調査の概要

那珂遺跡群第70次調査区は博多区竹下5丁目500番地に所在し、調査前は標高約10.1mを測る平地(畠地)であった。本調査区は遺跡群の南西部に位置し、周辺では比較的多くの調査が実施されている(Fig. 1)。

本調査区の概要を述べる前に簡単に周辺既往調査で得られた成果について触れておきたい。地形的には現況での遺構面の標高から本調査区北側の第9次・第41次調査区に挟まれた道路付近から本調査区の西側付近にかけて標高約9.7m前後の南北方向の尾根線が認められる。また、本調査区の北側約100mに位置する第26次・第33次調査区の遺構面は標高約11mを測ることからこの尾根は北側に高く傾斜するものと考えられる。なお、その尾根線を境界として東および西方向に緩斜面を有している。各時代の様相としては、旧石器時代の遺物包含層が第41次調査区で確認されており、鳥栖ローム層上部の赤褐色ローム層からナイフ形石器、彫器等が出土している。弥生時代では中期後半から後期中頃にかけて集落が形成され、本調査区をはじめ、第9次・第26次・第33次・第41次・第46次調査区で掘立柱建物、竪穴住居、井戸、溝等が検出されている。第41次SD-004は中期末に掘削されたと考えられる環濠で、東側の倉庫群を囲繞するものと考えられる。弥生時代終末期には遺跡群を南北方向に走行する並列溝(道路状遺構)が掘削され、その南端部が西側緩斜面上に位置する第9次・第33次・第48次調査区において確認されている。また、古墳時代初頭においてはその溝の東西に隣接して第9次・第41次調査区から本調査区にかけての尾根を主体とする範囲に方形周溝墓群が造営される。その後、古墳時代後期から奈良時代にかけて再び集落の形成が認められ、本調査区をはじめ周辺調査区で掘立柱建物、竪穴住居、井戸、土坑、溝等が検出される。本調査区や第26次・第41次で確認されている溝は比較的規模の大きな南北方向のもので、公的施設に伴う区画溝の可能性がある。

また、第22次SX-004から出土した神ノ前窯の瓦は注目される遺物である。中世前半期では第22次・第48次・第49次・第55次において掘立柱建物、井戸、土坑、溝等が確認されているが遺構の分布密度は薄い。また、後半期では第26次調査区において壇状の溝が検出されている。また、同調査区東側約60mに位置する第44次調査区においても方向は異なるが同様の溝が確認されている。居館を囲む区画であろうと推測される。

上記と一部重複する部分もあるが、本調査区の概要について述べることとする。遺構は表土下数10cmの鳥栖ローム上面で検出した。遺構面の標高は調査区西側のB区に緩いピークがあり、北側で9.8m、南側で9.7mを測る。また、北西隅は9.7m、北東隅は9.5m、南西および南東隅では9.5mを測り、尾根線と推定されるB区をほぼ境界として遺構面は東西両方向に緩く傾斜している。また、南北方向では僅かに北側が高い。壁面の土層観察(Fig. 14参照)では表土下に包含層が形成されており、北側では1層(A層)、南側では2層(A・B層)の包含層が鳥栖ローム上に堆積している。今回検出した主な遺構は弥生時代中期から後期の竪穴住居・土坑・井戸、古墳時代初頭の方形周溝墓、古墳時代後期の竪穴住居・土坑・埋葬遺構、古代の掘立柱建物・溝、中世前半期のピットである。

今回の調査は平成11(1999)年4月13日より重機による表土剥ぎから開始した。廃土処理を申請地内で行なわざるを得なかつたため、まず、西半部の調査を実施し、その終了後の5月14日に重機によって廃土反転および東側の表土剥ぎを行い、東半部の調査に着手した。なお、調査は5月31日に器材を撤収し、完了した。調査面積は339m²である。調査時の遺構番号は3桁の通し番号とし、001から遺構の種別に間らず付した。その番号に欠番はあるものの、重複はない。以下の報告にあたっても原則的

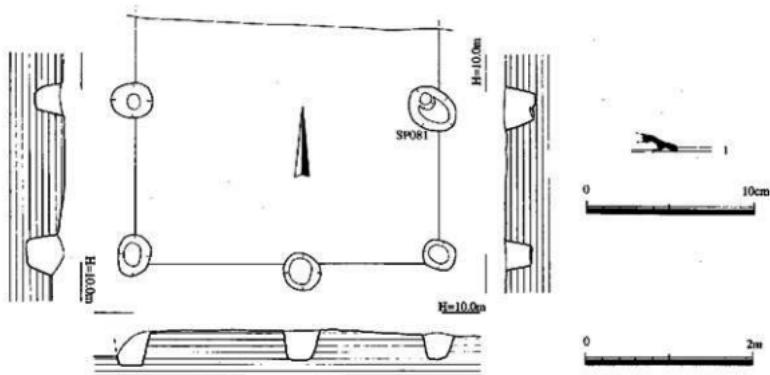


Fig. 3 SB017実測図(1/60)および出土遺物実測図(1/3)

に調査時の遺構番号を用い、例言に記した遺構略号と組み合わせて記述する。また、調査区内での遺構位置を本文中で示す際には調査時に用いた國土座標軸を基準とした10m単位での英字と数字によるグリッド表記(Fig. 2 参照)を用いる。

2. 遺構と遺物

1) 堀立柱建物(SB)

SB017(Fig. 3) B-C-1区に位置し、西側の柱穴はSX002を切る。柔間2間の南北方向の堀立柱建物で、桁行は北側が調査区外に位置するため不明であるが、2間以上と推測される。東側の柱が調査時の反転部にまたがったため、図上での復元である。建物方位はMN-6°-Eにとる。梁間全長は3.6m、柱間は西側がやや長く2.0m、東側が1.6mである。桁行の柱間は1.8mを測る。柱穴は円形を呈し、径0.4~0.6m、深さ0.3~0.4mを測る。なお、柱痕跡は確認できなかった。覆土は茶褐色粘質土である。

出土遺物(Fig. 3-1) 1はSP081から出土した須恵器壺蓋の口縁部片で、短いかえりを有する。内外面にはヨコナデを施し、胎土には白色砂粒が混じる。他に遺物は南東の隅柱を除く各柱穴から少量出土しているが、いずれも細片の弥生土器、須恵器片である。7世紀後半の建物であろう。

2) 積穴住居(SC)

尾根線から東側斜面にかけて弥生時代後期および古墳時代後期の積穴住居を計4軒検出した。いずれも遺存状況は良好ではない。

SC009(Fig. 4) B-2区で検出した方形プランの積穴住居で、SC010-011を切る。南側は調査区外に位置するため全容は不明であるが、東西長4.4m、南北長3.5mを測り、東西方向にやや長い長方形を呈するものと考えられる。壁面は約0.1m程度が遺存する。また、幅0.1~0.2m、床面からの深さ0.1~0.25mの壁溝が巡るが、東側では断続し、南東側の壁面には設置されない。床面ではビットを確認したが、主柱穴は不明であった。

出土遺物(Fig. 6-2~4) 2は須恵器壺蓋で、天井部と口縁部の境界に沈線が巡る。天井部外面の1/2には回転ヘラ削り、他はヨコナデを加える。また、天井部外面にはヘラ記号が認められる。3は須恵器壺であろう。頸部から大きくなき開き、口縁部外面を肥厚させる。復元口径は14.4cmを測る。内外面にはヨコナデを施す。4は砂岩製の砥石片で、表裏面および側面を底面として利用する。北西側の

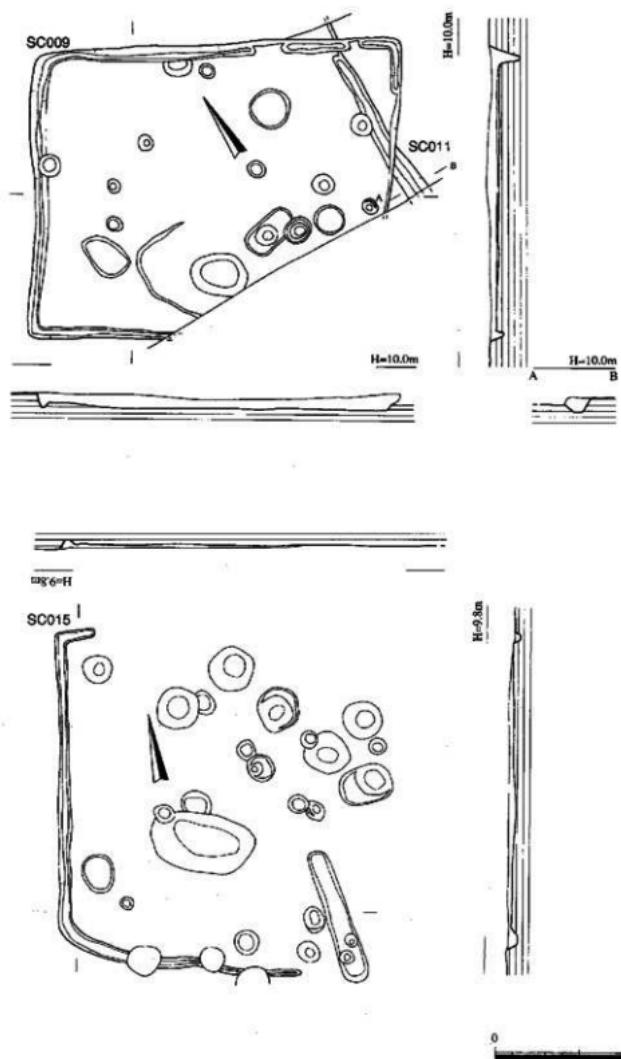


Fig. 4 SC009・011・015実測図(1/60)

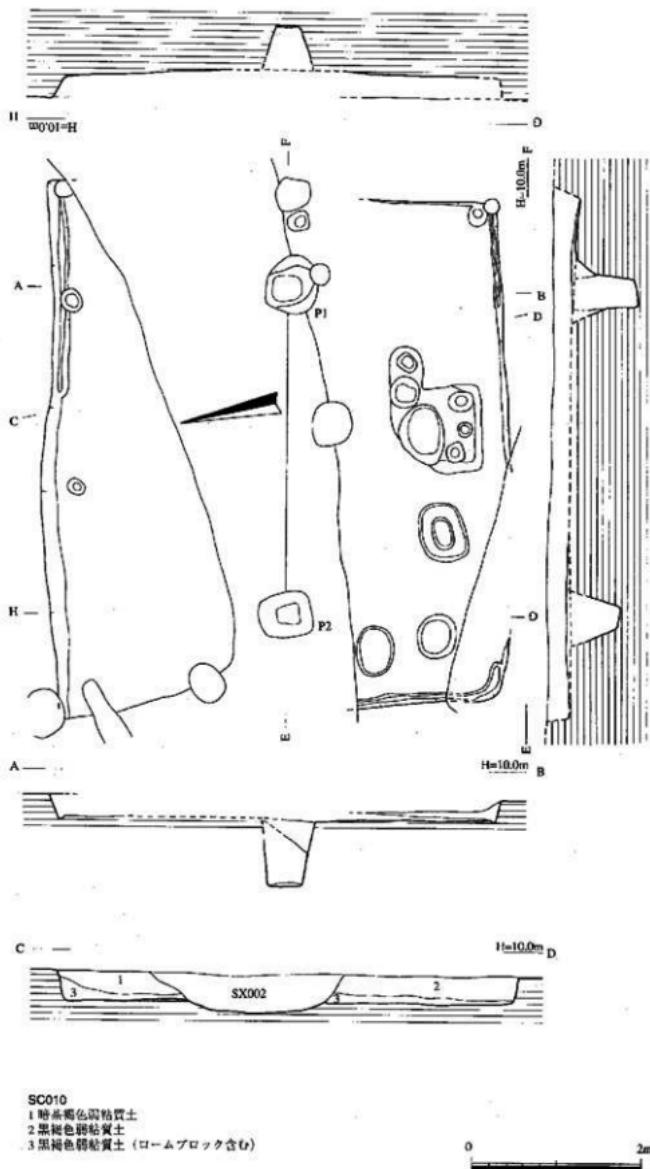


Fig. 5 SC010実測図(1/60)

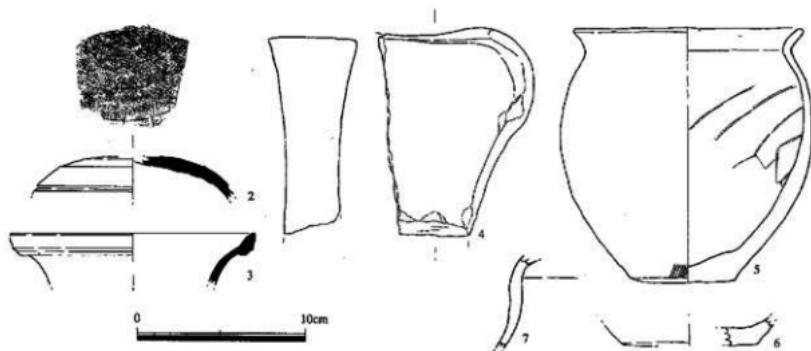


Fig. 6 SC009-010出土遺物実測図(1/3)

床面上で出土した。他に土器器の細片が少量出土した。6世紀中頃の堅穴住居と考えられる。

SC010(Fig. 5) B-C-1・2区で検出した方形プランの堅穴住居で、SK013-016を切っている。ほぼ中央部をSX002が東西方向に分断し、南西コーナーはSC009に切られる。西側の壁面も削平により遺存は不良であるが、現況では東西長5.85m、南北長5.5mを測る。比較的遺存の良好な北側では壁面の深さ0.35mを測る。壁溝は断続的に巡っており、北西側を除くコーナー部分に設置されている。幅0.1~0.2mを測り、床面からの深さは0.05mと浅い。底面上のロームブロック混じりの黒褐色土(3層)は貼床と考えられる。主柱穴はSX002の底面上で検出したP1、P2の東西方向の2本と考えられ、その柱間は3.8mを測る。P1は径0.7mの円形を呈し、深さは0.8m、P2は1辺0.55mの隅丸方形を呈し、深さは0.5mを測る。なお、中央炉はSX002によって削平されたものと推測される。

出土遺物(Fig. 6~7) いずれも弥生土器である。5は北西側の床面上に横倒した状態で出土した壺である。口径13.4cm、器高15.1cmを測る。僅かに凸状を呈する底部から丸味のある胴部へと続き、口縁部は「く」字状に外反する。全体に器面の風化が進行するが、外面の底部付近には縦方向の刷毛目、胴部内面の上半には板ナデが残る。6も5と同様の底部を呈する壺である。7は鉢の胴部上半片と考えられる。6・7共に器面が風化する。以上の出土遺物から弥生時代後期中頃の堅穴住居と考えられる。

SC011(Fig. 4) B-2区で確認したが、SC009-010に切られるため、東側の壁面が僅かに遺存するにとどまる。残存状況から方形プランを呈すると推定される。また、幅0.2m、床面からの深さ0.1mの壁溝が巡る。出土遺物がないため時期は不詳であるが、その平面プランやSC010に切られること、また周辺の遺構時期から弥生時代中期末から後期前半の所産と類推される。

SC015(Fig. 4) C-2区に位置する方形プランの堅穴住居で、SX002を切る。東半部は削平により壁面が消失する。西側の壁面の長さは約4mを測るが、深さは0.05m程度しか遺存していない。また、幅0.1~0.2m、深さ0.1mの壁溝が「コ」字状に遺存している。床面と推定される範囲内にピットが検出されたが、この住居に帰属する柱穴は不明である。SC011同様に出土遺物がないが、SX002との重複状況や周辺遺構時期から古墳時代後期の堅穴住居と推定される。

3) 土坑(SK)

SK005(Fig. 7) B-1区に位置する隅丸長方形の土坑で、長さ1.35m、幅0.9m、深さ0.75mを測る。底面は平坦である。壁面は直立気味に立ち上がり、断面は箱形に近い。下層では覆土にロームブロック

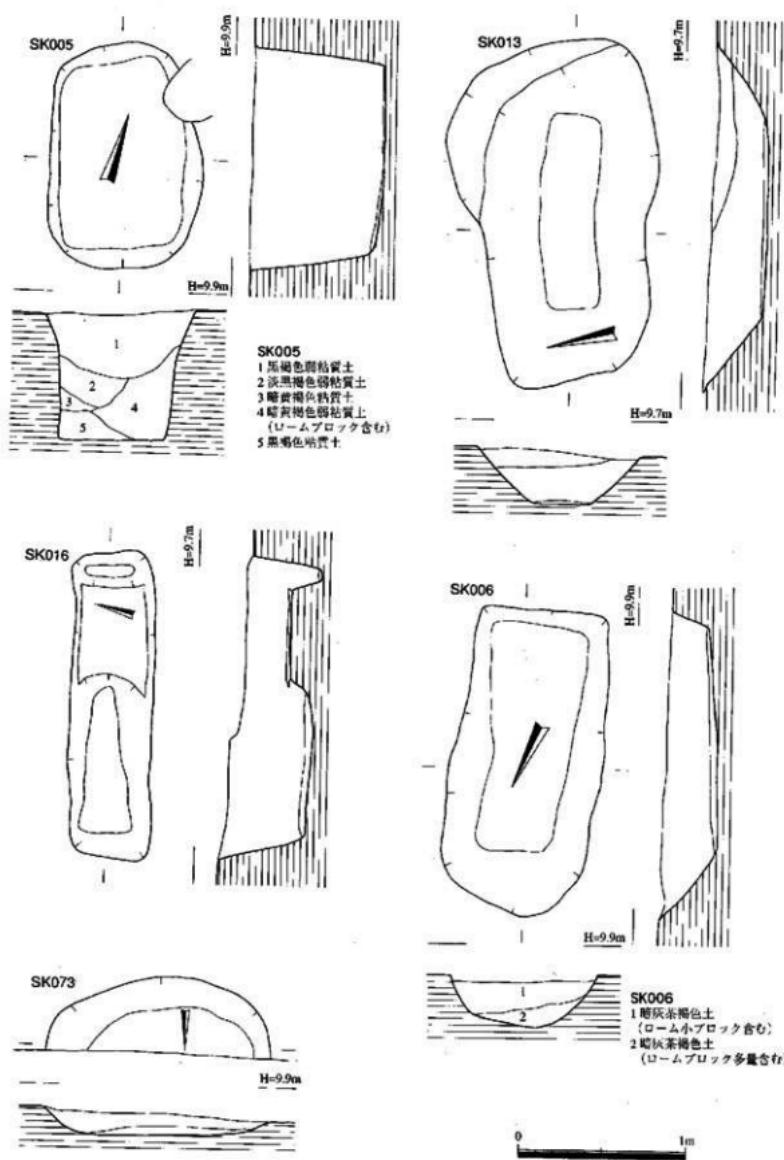


Fig. 7 SK005-006-013-016-073実測図(1/30)

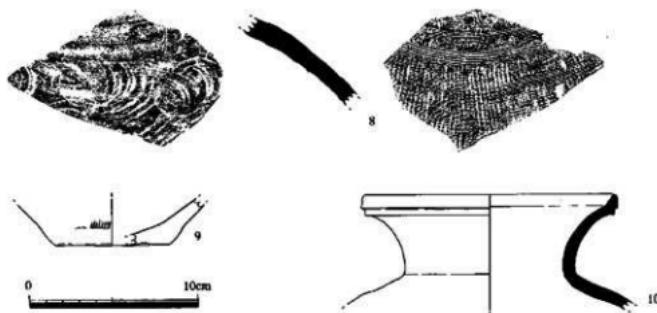


Fig. 8 SK006-013-073出土遺物実測図(1/3)

クが混入し、土層の堆積状況からも人為的な埋土と考えられる。また、そのプランから土壙墓等の埋葬構造の可能性がある。なお、出土遺物はない。

SK006(Fig. 7) B-2区で検出した土坑で、平面プランはやや不整な隅丸長方形を呈する。長さ1.8m、幅0.95m、深さ0.3mを測る。断面は逆台形をなす。底面の平面プランは隅丸長方形をなし、ほぼ平坦である。

出土遺物(Fig. 8-8) 須恵器壺の胸部片である。外面は格子目叩きにカキ目を施す。内面には青海波状の當て具痕が認められるが、ヨコナデを加えている。他に土師器片が少量出土している。古墳時代後期の遺構と考えられる。

SK013(Fig. 7) B-2区で確認した土坑で、SX002、SC010に切られるため、上面での平面プランは不整な隅丸長方形を呈するが、底面はやや狭長な隅丸長方形をなす。現況で長さ2.0m、幅1.25m、深さ0.3mを測る。断面は逆台形で、底面は平坦である。覆土は暗褐色粘質土に多量のロームブロックが混じる。

出土遺物(Fig. 8-9) 弥生土器の壺底部である。内外面共に器面が風化するが、外面には僅かに縦方向の刷毛目が残る。覆土の下層から出土した。他に弥生土器片が数点出土している。出土遺物やSC010との前後関係から弥生時代中期末から後期初頭の遺構と考えられる。

SK016(Fig. 7) C-2区に位置する。SC010に切られる隅丸長方形の土坑で、長さ1.8m、幅0.5mを測る。西側に平坦面を有し、西壁沿いには幅0.2m、上面からの深さ0.45mの掘り込みを有する。また、東側はその平坦面から0.15m深く掘り込む。覆土は灰茶褐色粘質土で、ロームブロックを多量に含む。弥生土器が少量出土したが、いずれも細片である。

SK073(Fig. 7) B-1区で検出したが、遺構の大半は調査区外に位置する。円形もしくは梢円形を呈するものと考えられる。SD003を切る。現況で、径1.4m、深さ0.1mを測る。覆土は茶褐色粘質土である。

出土遺物(Fig. 8-10) 須恵器の壺で、口線上端部は尖り気味に引き出す。下端は段状をなす。頸部は強くすぼまり胸部へと続く。内外面にはヨコナデが施されるが、胸部外面には僅かに平行叩き目が残る。他に土師器の細片が少量出土している。

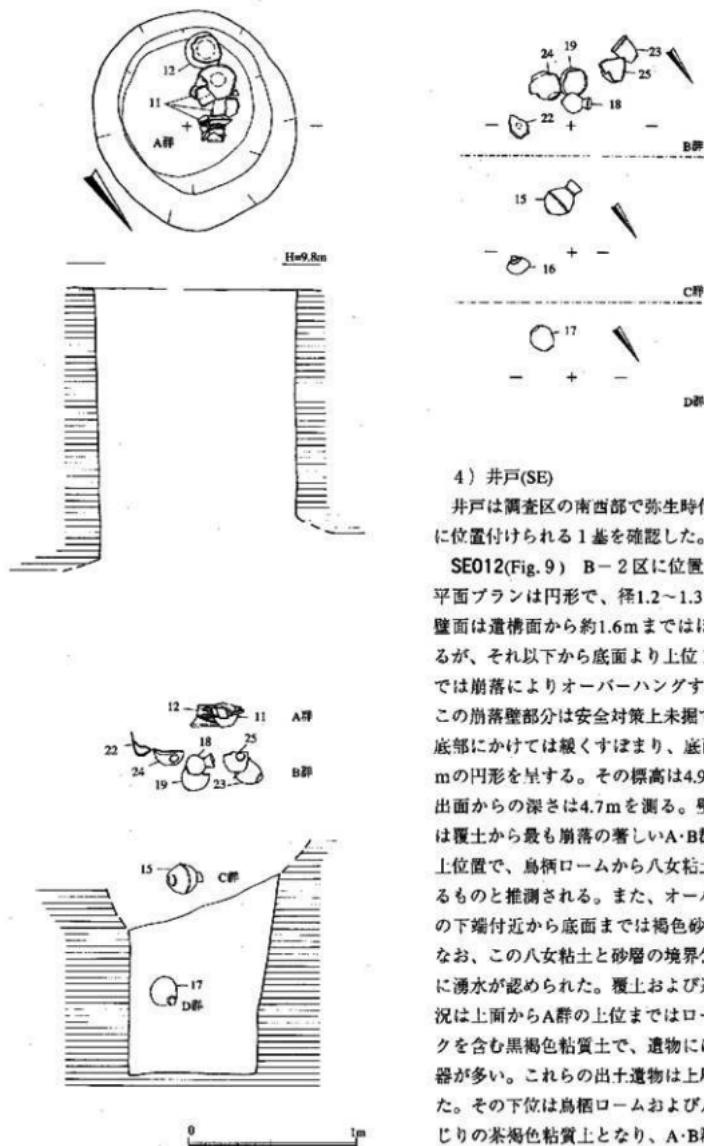


Fig. 9 SE012実測図(1/30)

4) 井戸(SE)

井戸は調査区の南西部で弥生時代後期中頃に位置付けられる1基を確認した。

SE012(Fig. 9) B-2区に位置している。平面プランは円形で、径1.2~1.3mを測る。壁面は造構面から約1.6mまではほぼ直立するが、それ以下から底面より上位1m前後までは崩落によりオーバーハングする。なお、この崩落壁部分は安全対策上未掘である。基底部にかけては緩くすぼまり、底面は径0.75mの円形を呈する。その標高は4.95mで、検出面からの深さは4.7mを測る。壁面の土層は覆土から最も崩落の著しいA・B群の遺物出土位置で、鳥柄ロームから八女粘土に変化するものと推測される。また、オーバーハングの下端付近から底面までは褐色砂層である。なお、この八女粘土と砂層の境界付近で僅かに湧水が認められた。覆土および遺物出土状況は上面からA群の上位まではロームブロックを含む黒褐色粘質土で、遺物には小片の土器が多い。これらの出土遺物は上層遺物とした。その下位は鳥柄ロームおよび八女粘土混じりの茶褐色粘質土となり、A・B群の上器群(蓋・甕)がまとまって出土した。更にその下位約0.5mに遺物を含まない暗黄褐色粘質土

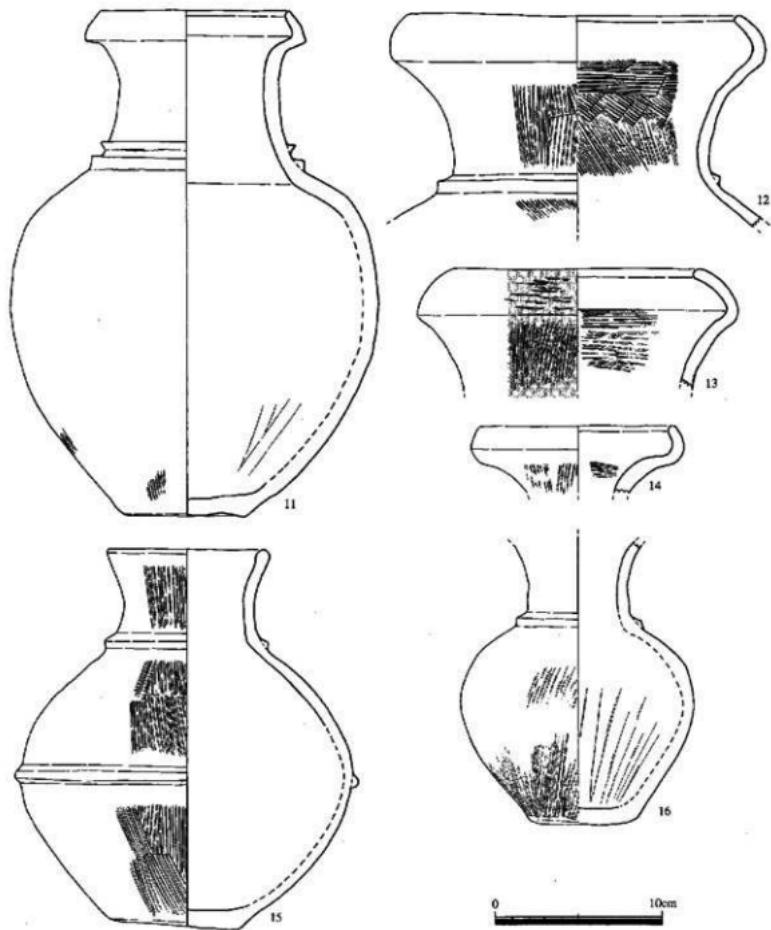


Fig.10 SE012出土遺物実測図(1)(1/3)

を挟み、C群とした2個体の壺が出土した。また、その下層は淡黄灰褐色粘質土となり、壺1個体(D群)が確認できた。これら遺物群の出土状況から計4回の土器祭祀を行なっていることが推測される。

出土遺物(Fig.10~12) 11~21は壺である。21は上層、11・12・14・20はA群、13・18・19はB群、15・16はC群、17はD群出土である。11~14は複合口縁壺で、11を除いて口縁部の屈曲は緩く、上半部は外渦気味にカーブする。11は胴部の上半に最大径を有し、頸部との境界には断面三角形の突帯を2条貼付する。胴部外面は刷毛目の後ナデ、内面にはヘラナデが残る。底部は平底である。口径11.2cm、器高

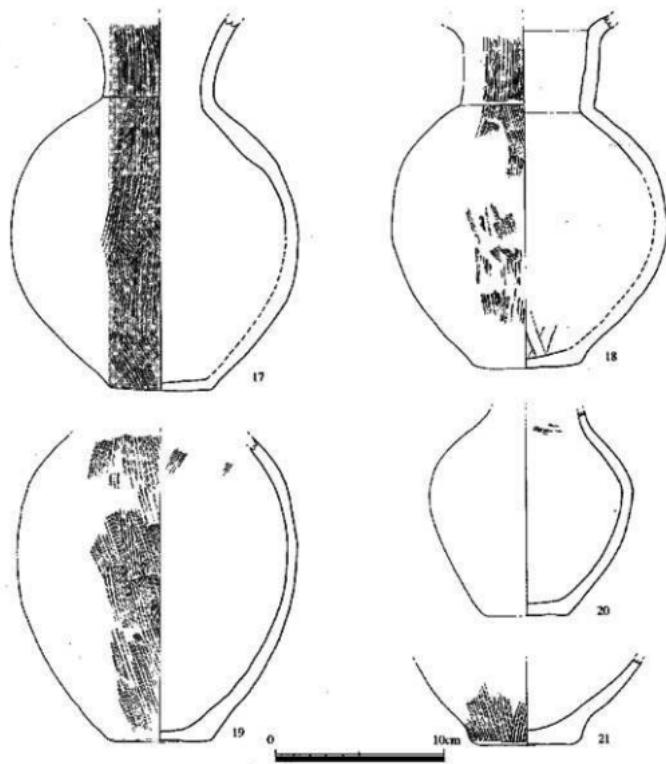


Fig.11 SE012出土遺物実測図(2)(1/3)

30.1cmを測る。12は口径19.6cmを測り、頸部と胴部の境界に断面三角形の突帯が1条巡る。内外面に刷毛目調整を施し、口縁部上半および突帯部にはヨコナデを加える。頸部内面には爪跡と考えられる痕跡が認められる。13も12と同様の調整を施し、外面に赤色顔料を塗布する。14は小片で、頸部が強くすぼまる。15は底部および口縁部の一部を欠失するが、残存状況は良好である。底部は平底でやや扁球状の胴部に頸部および口縁部が開き気味に立ち上がる。その境界と胴部中位には突帯を貼付し、前者は断面三角形、後者は断面台形を呈する。外面は縦方向の刷毛目を施し、口縁部および突帯部にはヨコナデを加える。胴部の内面は刷毛目およびヘラナデを施す。口径9.3cm、器高23.5cmを測る。16は肩が張る器形を呈し、外反する頸部を有する。その境界には断面三角形の低い突帯が巡る。底部は僅かに凸状をなす。器面の風化が進むが、外面には刷毛目が残り、内面はヘラナデを施している。17~19の胴部はやや継長の球形で、屈曲して頸部へと連なる。底部は平底である。いずれも外面には縦方向の刷毛目を施す。17は他に比してやや粗い原体を用いて調整し、赤色顔料を塗布する。内面は17・19はナデ、18の下半部にはヘラナデが認められる。18は頸部内面の上位に屈曲が見られる。20は胴部の

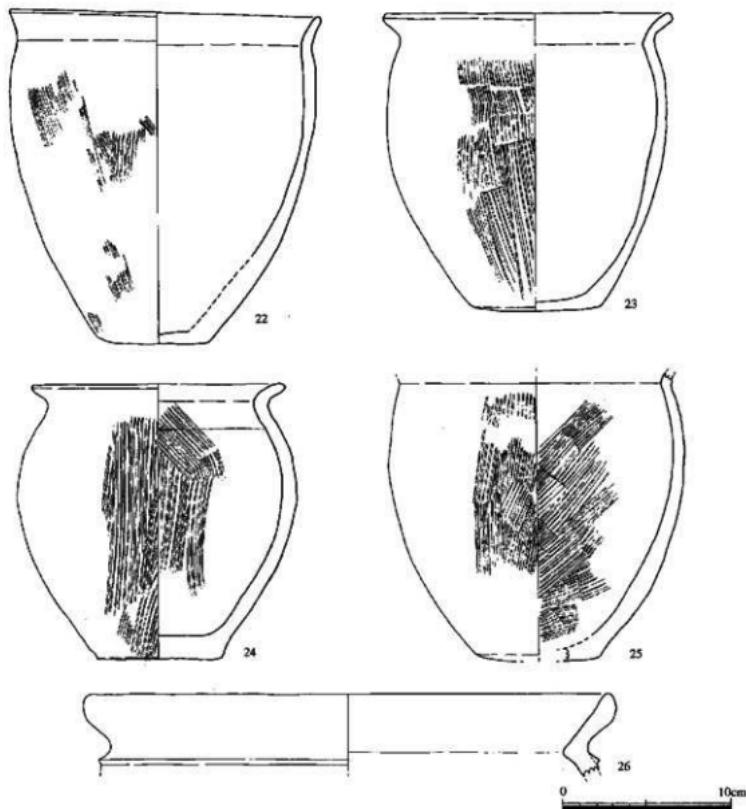


Fig.12 SE012出土遺物実測図(3)(1/3)

上半で緩く屈曲し、底部は平底となる。器面の風化が進む。胎土には砂粒が目立つ。21は平底の底部で、外面は刷毛目、内面はヘラナデ調整を施す。

22~26は壺である。22~25はB群、26は上層出土である。22~25は小形の壺で、「く」字状の短い口縁部を有する。24の胴部は丸味をもつ。25の底部はやや凸状を呈するが、他は平底である。いずれも胴部外面は刷毛目調整で、内面は22~23はナデ、24~25は刷毛目を施す。22の口縁部内面には刷毛目が認められる。22~24の口径は順に18.3、16.7、15.0cm、器高は19.7、17.8、16.4cmである。26は復元口径30.6cmを測る大型の壺片で、口縁部は内溝気味に立ち上がり、口縁下に断面三角形の低い突帯を貼付する。

5) 溝(SD)

SD003(Fig. 2・13) A-B-2区、B-1区に位置する南北方向の溝で、方位をMN-16°-Eにとる。な

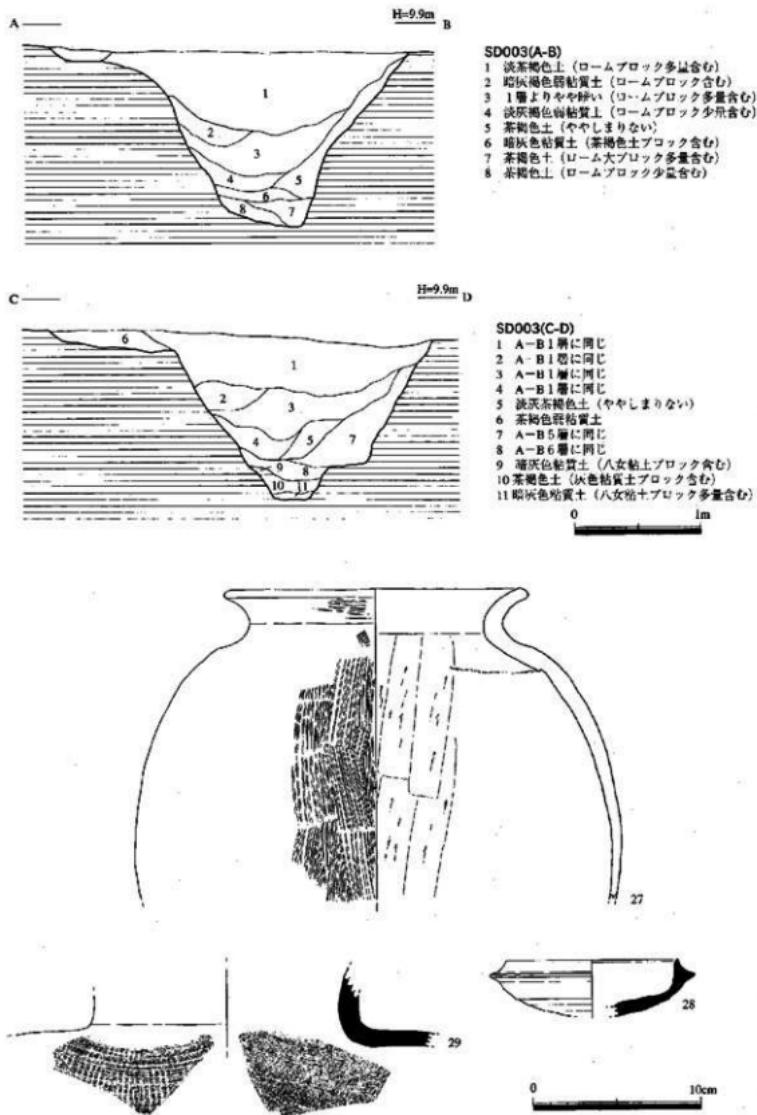


Fig.13 SD003実測図(1/40)および出土遺物実測図(1/3)

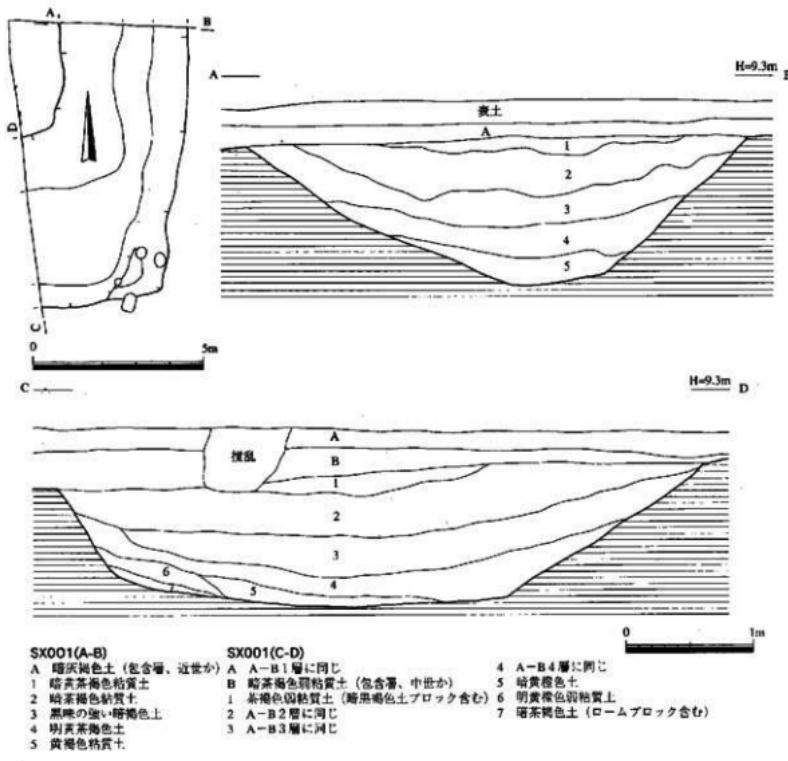


Fig.14 SX001実測図(平面図は1/150、土層図は1/40)

お、両方向共に調査区外に延伸している。幅は南端部で3.0m、北端部で2.0m、深さは1.3~1.5mを測る。断面は逆台形を呈する。南半部の上層東側および下層西側には平坦面を有する。溝底の標高は8.2~8.3mで、顕著な高低差は認められない。断面観察では掘り直しが看取され、A-Bの1~4層、C-Dの1~5層が該当する。その溝底の標高は約8.6mを測り、当初よりやや浅く掘り直されている。なお、第41次調査(Fig.1参照)SD006はこの溝の北側延長と考えられ、8世紀代の須恵器が出土している。

出土遺物(Fig.13) 第41次調査同様に出土遺物は少量である。27は土師器甕で、外反する口縁部を有する。肩部には鈍い屈曲が認められ、内面には接合痕が残る。外面は刷毛目、胴部内面はヘラ削りを施す。28は須恵器壺身で、立ち上がりは内傾する。復元口径は10.2cmを測る。底部外面は回転ヘラ削り、他はヨコナデを行なう。29は須恵器甕である。胴部外面は平行叩きの後、回転クシナデを加える。内面はヨコナデ調整を行なうが、胴部に青海波状の当て具痕が残る。

6) 墓葬関連遺構(SX)

本項では検出遺構のうち、埋葬関連と考えられる4遺構を報告する。古墳時代前期の方形周溝墓2基(SX001-002)および古墳時代後期と推定される礎床を有する土塙墓2基(SX004-014)である。

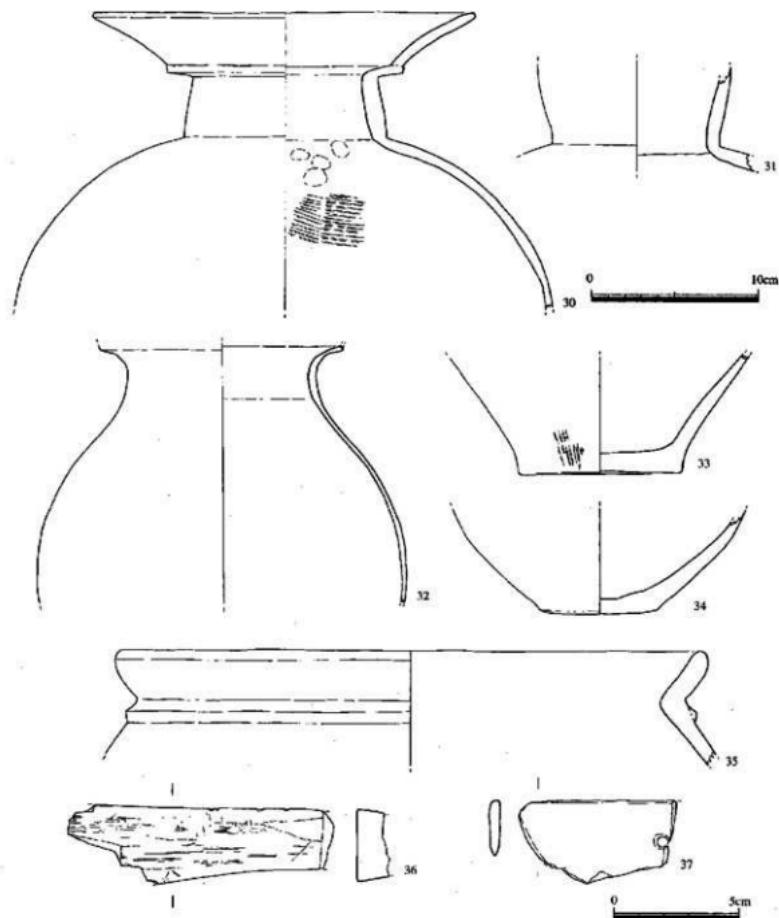


Fig.15 SX001出土遺物実測図(37は1/2、他は1/3)

SX001(Fig.14) 調査区北西端のA-1・2区で確認した方形周溝墓である。墳丘盛土および主体部は消失している。検出し得たのは周溝の南東コーナーと推測される部分で、大半は調査区外に位置する。現況ではコーナーを境界として北側(十層岡A-B)と西側(同C-D)とではその規模に差異が認められる。前者は後者に比して狭く掘削され、幅は上面で3.9m、底面で0.8m、西側では上面で5.1m、底面で3.0mを測る。ただし、共に断面は逆台形を呈し、墳丘側の内縁部の壁面は傾斜がやや緩く、外縁側はその立ち上がりが比較的急である。底面の標高は8.45~8.65mを測り、コーナー部が僅かに低い。また、コーナー部の外縁には上面からの深さ0.5mに狭いテラスを設けている。覆土はレンズ状に堆積し、

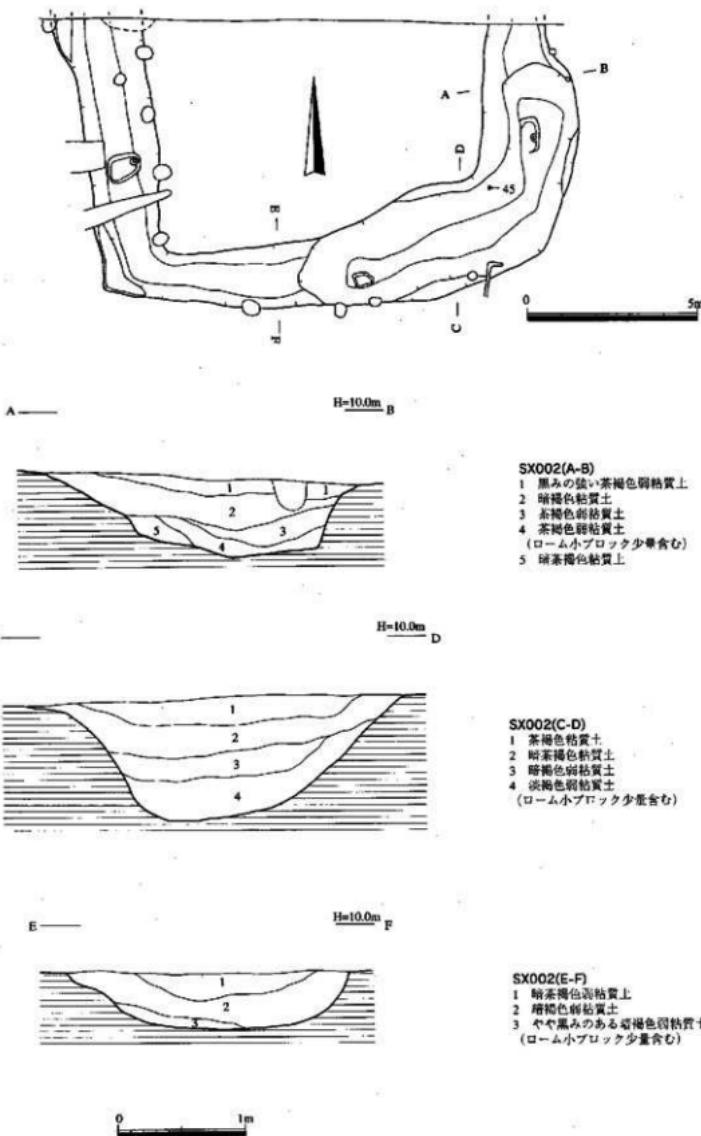


Fig.16 SX002実測図(平面図は1/150、土層図は1/40)

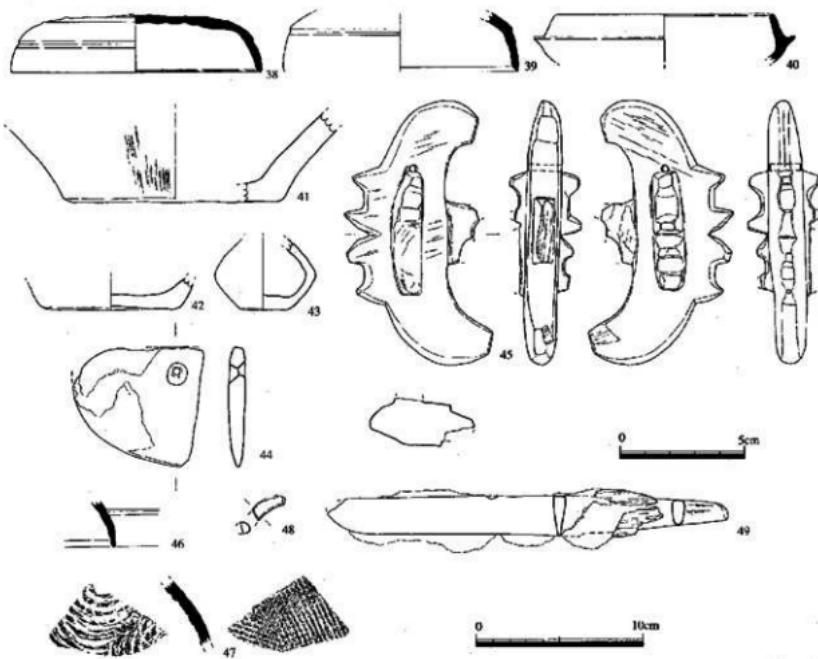


Fig.17 SX002・004・014出土遺物実測図(44・45・48・49は1/2、他は1/3)

一方向からの顕著な流入は看取されない。調査時の遺物取り上げに際しては、土層図のほぼ1~3層を上層遺物、以下を下層遺物とした。

出土遺物(Fig.15) パンケース1箱程度が出土したが、中期から後期の弥生土器小片が最も多い。続いて少量の上師器、須恵器等が出土している。30~32は土師器である。30・31は畿内系二重口縁壺で、30は胴部に向かって僅かに開く頸部に、ほぼ水平に開く口縁下部が付く。更に外反気味に広がる口縁上部をのせ、その端部は面取りを施している。球形を呈する胴部内面には横方向の刷毛目および指才サエが一部に認められるが、他は器面の風化が著しい。胎土には砂粒を少量含む。復元口径は22.4cmを測る。下層出土である。31は上層出上で、頸部は開き気味に立ち上がる。器面の風化が進む。32は上層出上の山陰系二重口縁壺で、ナデ肩の胴部を有する。器面の風化が著しい。色調は黄白色である。33~35は上層出土の弥生土器壺である。33・34は底部で、33は半底、34は僅かに凸レンズ状を呈する。35の口縁部は内湾気味に立ち上がり、口縁下に断面三角形の突帯を貼付する。36は粘板岩製の砥石、37は安山岩質凝灰岩ホルンフェルス製の石庖丁で、共に上層出土である。

SX002(Fig.16) 調査区北側のB・C-1・2区に位置する方形周溝墓である。SX001同様に墳丘盛土および主体部は削平を受け、南半部の周溝のみが遺存する。なお、北半部分は調査区外に延びる。他遺構との前後関係はSC010、SK013を切り、SB017、SC015、SX004に切られている。現況では東西方向

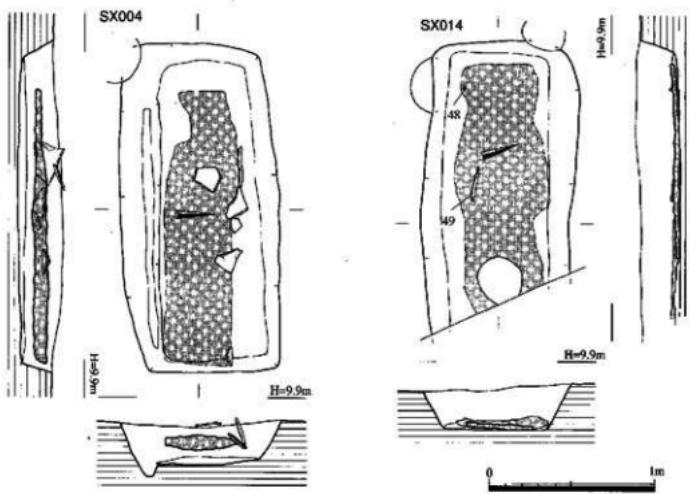


Fig.18 SX004-014実測図(1/30)

の外縁幅14.6m、内縁幅10.0mを測る。溝の幅や深さは齐一ではなく、位置によって差異が認められる。まず、西辺の崩壊は幅2.1m前後、深さ約0.5mを測る。底面の北端部の標高は9.2mで、コーナー部にかけて緩やかに高くなり、その標高は9.35mである。コーナーの外縁部には上面からの深さ0.15mにテラスを造り出す。その南西コーナーから南辺に移行する部分で、上面および底面幅が狭くなる。また、中央部にかけて底面は緩やかに低くなりながら幅員を再び上面共に増す。その南辺中央部での底面標高は9.1mを測る。そこから南東コーナーを経て東辺の北側にかけては約0.5m深い掘削が行なわれており、上面からの深さは約1m、幅は2.8mと幅員を増す。その箇所の底面は僅かな起伏があるものほぼ平坦で、その標高は8.6m前後である。現況の東辺北端の調査区際で、底面は立ち上がり、標高は9.4mとなる。また、幅は1.8mと狭くなる。壁面はSX001と同様に内縁部墳丘側は傾斜がやや緩く、外縁側はその立ち上がりが比較的急である。覆土はレンズ状に堆積するが、下層は墳丘側からの流土と推測される。

出土遺物(Fig.17-38~45) 出土遺物はパンケース1箱程度で、掘削面積に比して遺物は少量であった。南東側の掘り込み部については上・中・下層の3層、他については上・下層の2層に分けて遺物の取り上げを行なったが、弥生土器や溝の埋没時に混入した上層の須恵器等の小片が多い。該期に相当する古式土師器は細片が多く、固化し得た個体はない。また、以下の図化遺物はいずれも上層もしくは中層出土である。38~40は須恵器である。38・39は壺蓋で、天井部と口縁部の境界に沈線が巡る。復元口径は順に14.6、13.8cmを測る。40は壺身で、内傾気味の立ち上がりを有する。41~43は弥生土器で、41・42は煮もしくは壺の底部、43は扁球形の胴部を呈するミニチュアの壺である。44は安山岩質凝灰岩ホルンフェルス製の石庖丁で、両面から穿孔を行なう。45は南東コーナー内縁部側の上面付近で出土した滑石製子持勾玉である。全長10.5cm、最大幅5.9cm、最大厚2.8cmを測る。頭尾の両端部は研磨により面をなす。また、頭部には径0.3cmの穿孔を施す。腹部1個、背部に2個、両側面に各2個の子勾玉

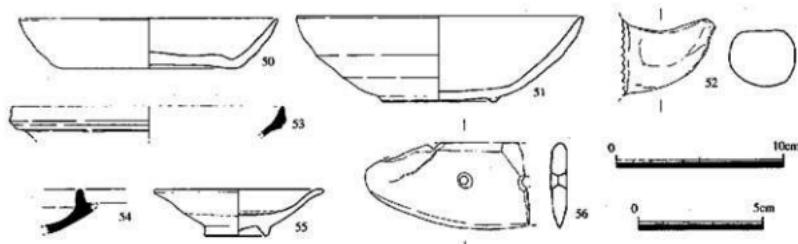


Fig.19 ピット・造構検出面出土遺物実測図(56は1/2、他は1/3)

を削り出すが、背部を除き、欠損部位がある。なお、背部の各子勾玉の頭尾両端部は鋭角状に作出し、側面のそれは平坦に仕上げている。本体断面は蒲鉾形を呈し、腹部および両側面は直線的で、背部は丸味を有する。側面には斜方向の擦痕が残る。

SX004(Fig.18) B-1区に位置し、SX002を切る。長さ1.95m、幅0.95m、深さ0.25mを測る隅丸長方形の掘り方の底面上0.1mに径2~5cmの大花崗岩小礫を長さ1.6m、幅0.4mの長方形の範囲(岡網掛け部)に厚さ約5~8cm敷く。礫床下には暗褐色土ブロック混じりの暗黄褐色土が堆積する。南側壁面沿いには幅約0.1m、底面からの深さ0.1mの溝を設ける。また、北側側面には板石片が傾斜して出土しており、箱式石棺の可能性もある。主軸方位はMN-85°-Wを測る。

出土遺物(Fig.17~46) 上面出土の須恵器壊蓋片である。外面には沈線が巡り、口縁端部は丸く收める。調整は外外面共にヨコナデである。他に土師器、須恵器が少量あるが、いずれも細片である。

SX014(Fig.18) C-2区で検出したが、東側は調査区外に延びている。SX004と類似した構造を有し、残存長1.7m、幅0.9m、深さ0.25mを測る隅丸長方形の掘り方の底面直上に同様の小礫を幅0.5mの範囲(岡網掛け部)に厚さ3~4cm敷いている。その上層はロームブロック混じりの暗茶褐色土である。主軸方位はMN-66°-Wにとる。

出土遺物(Fig.17~47~49) 47は上層出土の須恵器壊片で、外面は格子目叩き、内面には青海波状の當て具痕が認められる。48は礫床上的南西隅で出土した耳環片で、銅芯のみが遺存する。断面復元径は0.5cmを測る。銹化が著しい。49は鉄製刀子で、中央南側の礫床上で刃先を東側に向けて出土した。茎には木質が遺存するが、全体に銹化が進む。全長16.0cm、刃幅2.5cm、背厚0.5cmを測る。他に弥生土器の細片が少量出土している。

7) その他の遺物(Fig.19)

本項ではピット出土および造構検出時に出土した遺物について報告する。50はA-2区SP059、51はC-1区SP153、他は検出面出土の遺物である。50は板状圧痕を有する回転ヘラ切り底の土師器壊、51は瓦器壊で、断面台形状の低い高台を貼付する。器面の剥落が著しい。52は土師器壊の把手である。指ナデ調整を行う。53は須恵器壊の口縁部、54は須恵器壊身で、受け部端部を欠失する。55は見込みの袖を輪状にカキ取る白磁皿である。56は凝灰岩ホルンフェルス製の石壺丁である。

第三章まとめ

今回の調査で確認した主な遺構は弥生時代中期末から後期中頃(Ⅰ期)、古墳時代初頭(Ⅱ期)、古墳時代後期(Ⅲ期)、古代(Ⅳ期)に大別し得る。個別の遺構発属時期については本文中で触れたが、本項では周辺調査区を含めた各遺構の時期的関連性やその推移について述べたい。なお、周辺調査区の時期的変遷の概要については「第二章-1.」を参照されたい。

まず、Ⅰ期の遺構としてはSC010・011、SK013、SE012が挙げられる。また、SC010との重複関係からSK016も該期に相当すると推測される。SX002の墳丘盛土推定範囲内で検出したSK005は出土遺物がないものの、黒褐色系の覆土から方形周溝墓築造前の遺構と考えられ、同様に該期に帰属するものと推察される。SC010、SE012は高三溝式新段階から下大隈式古段階の所産と考えられ、後者からは井戸祭記に伴う良好な一括遺物が出土した。該地周辺では中期末に集落が出現し、第20次・23次・41次調査区においては掘立柱建物、堅穴住居、井戸および溝状遺構により構成される良好な遺構群が検出されている。第41次調査の報告者は溝がそれぞれの掘立柱建物群(倉庫)を囲繞し、その外側の居住域を区分するものと推察している¹⁾。本調査区では第41次調査区で検出されたSD004の南側部分が未確認であることからこの溝は両調査区間で、東側に屈折するものと推測される。また、この溝との位置関係から本調査区検出の堅穴住居や井戸等は溝外部の集落遺構と考えられよう。なお、該期の遺構は本調査区南側の第22次・48次・55次では検出されておらず、該地では本調査区が集落の南端部に相当するものと考えられる。

Ⅰ期からやや時間的断絶が認められるが、続くⅡ期において該地では方形周溝墓群が造営される。本調査区でのSX001・002が該当し、布留式古段階に併行する遺構である。本調査区北側の第9次・41次調査区を含め、現在のところ計7基が確認されている。これらは弥生時代終末期に設置された本遺跡群を南北方向に継貫する道路状遺構²⁾の東西に隣接して営まれる。該地ではこの道路状遺構は第33次調査区から第9次調査区を経て第48次調査区に至っている。これらの方形周溝墓群は先行して設置された道路状遺構に規制される形で、その延伸方向に周溝をほぼ並行して築造されている。なお、いずれも墳丘盛土は削平されたため、主体部は遺存していない。また、墳丘の削平はその周溝内部で確認された後世の遺構の時期から類推すると、比較的早い段階に行われている。周溝出土の須恵器から6世紀中頃から後半には周溝が埋没している。その後、7世紀には各墳丘の削平が行われ、周溝内に遺構が掘削されている(後述Ⅳ期-SB017等)。

Ⅲ期においては再び集落として土地利用がなされ、該期の遺構としてはSC009、SK006・073が挙げられる。また、SX002を切るSC015も該期に含まれ、6世紀中頃から後半に比定される。周辺調査区においても該期から奈良時代にかけての掘立柱建物、堅穴住居、井戸等が確認されている。なお、これらのうち、SX004・014は出土遺物が少量ながらも該期に相当すると考えられる異質な遺構で、その構造や遺物出土状況から埋葬遺構としたものである。両者は主軸方位を類似した東西方向に有し、ほぼ同時期に埋葬された可能性が高い。これらの遺構については類例を待って検討を加えたい。また、SX002の上層で出土した滑石製子持勾玉はその法量から7世紀前葉に比定される³⁾もので、この遺物との関連性も看過できない。

Ⅳ期にはSB017、SD003が相当する。SB017出土遺物は細片であるため、消極的ながら小出編年VI期、7世紀後半に位置付けられる。SD003は本文中でも触れたが、第41次調査SD006と同一遺構と考えられる溝で、同調査区では8世紀代の遺物が出土している。

註

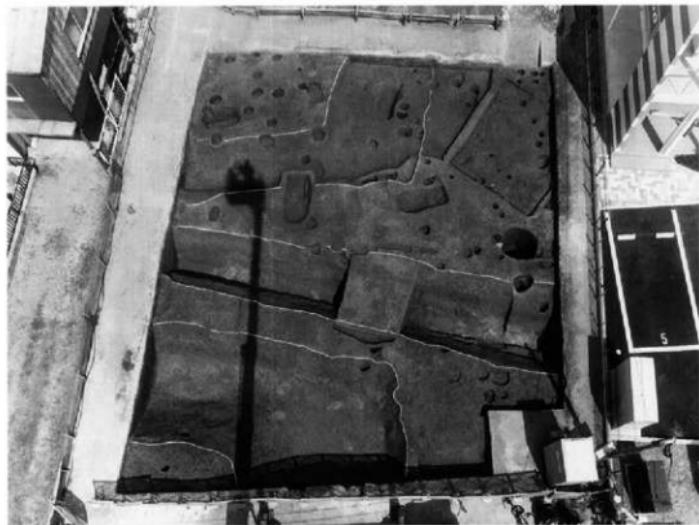
1) 菅波正人「第4章 第41次調査の記録」『那珂14』(福岡市埋蔵文化財調査報告書第399号) 1995年

2) 久住猛雄「弥生時代終末期「道路」の検出」『九州考古学 第74号』 1999年

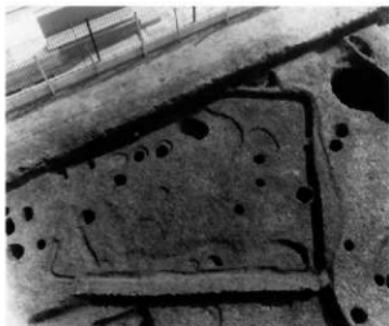
3) 大平茂「子持勾玉年代考」『古文化談叢 第21集』 1989年



Ph. 1 第70次調査区東半部全景(西から)



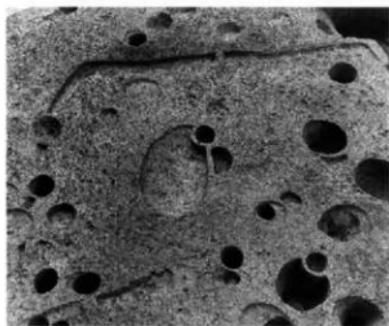
Ph. 2 第70次調査区西半部全景(西から)



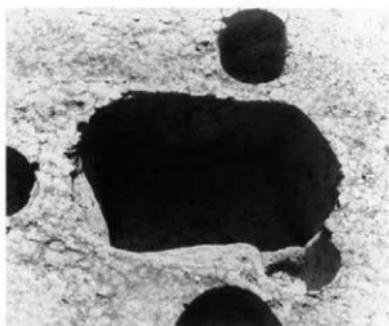
Ph. 3 SC009-011(北東から)



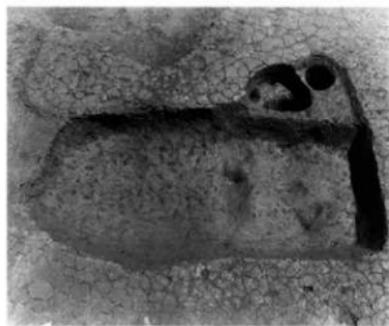
Ph. 4 SC010東半部(北から)



Ph. 5 SC015(東から)



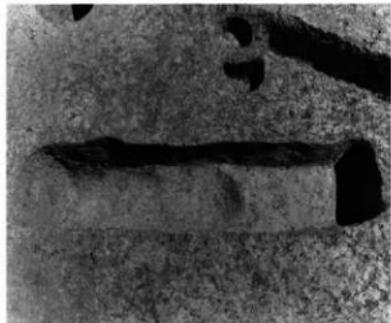
Ph. 6 SK005(東から)



Ph. 7 SK006(西から)



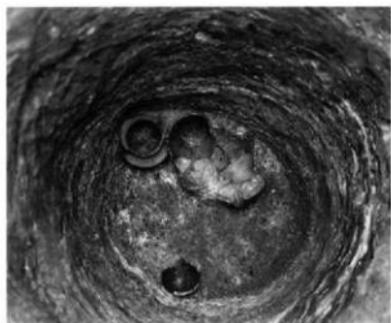
Ph. 8 SK013(北から)



Ph.9 SK016(北から)



Ph.10 SE012(北から)



Ph.11 SE012 A群遺物出土状況(西から)



Ph.12 SE012 C群遺物出土状況(北から)



Ph.13 SD003(北から)



Ph.14 SD003 A - B 土層(北から)



Ph.15 SX001 A - B 土層(南から)



Ph.16 SX001 C - D 土層(東から)



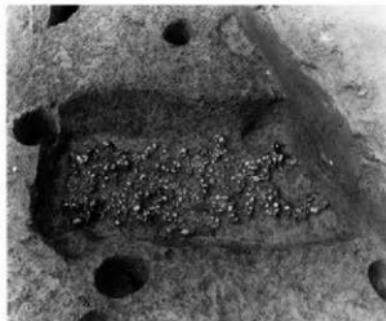
Ph.17 SX002 C - D 土層(東から)



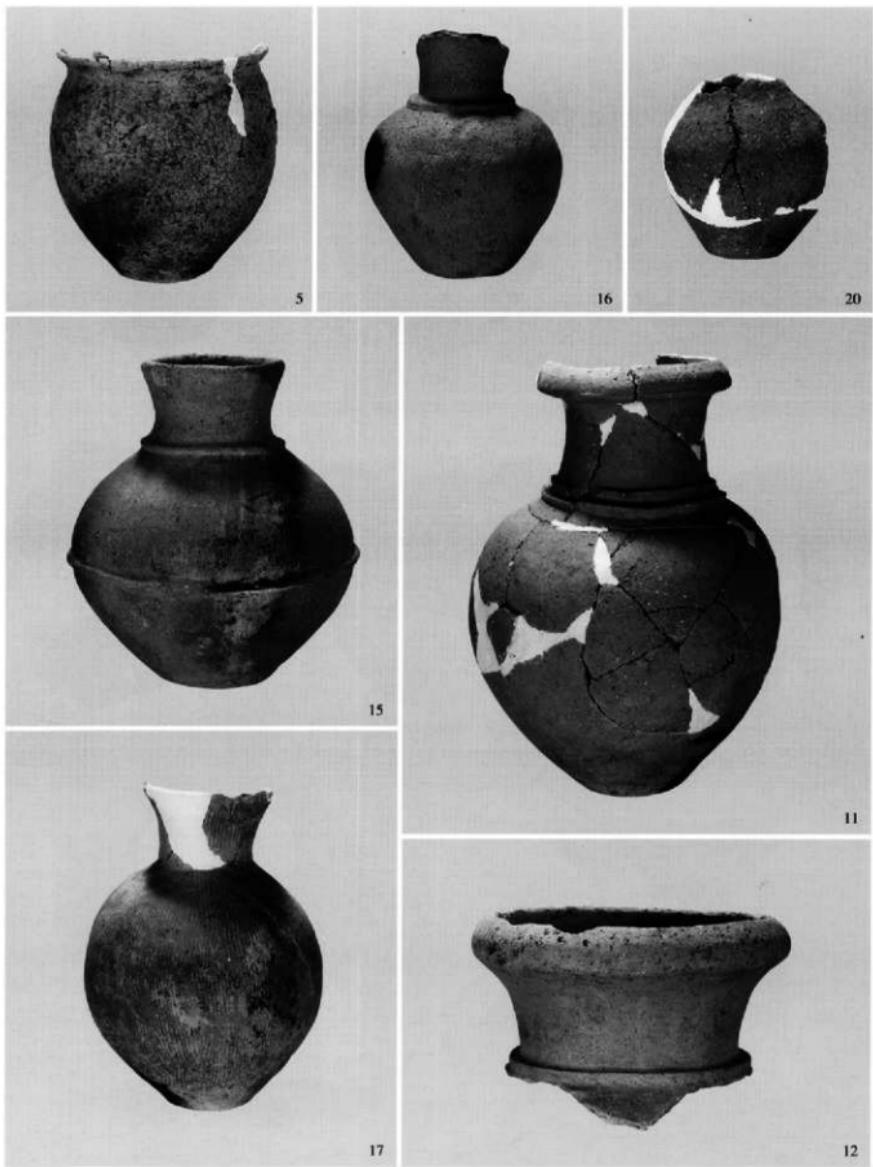
Ph.18 SX002 A - B 土層(南から)



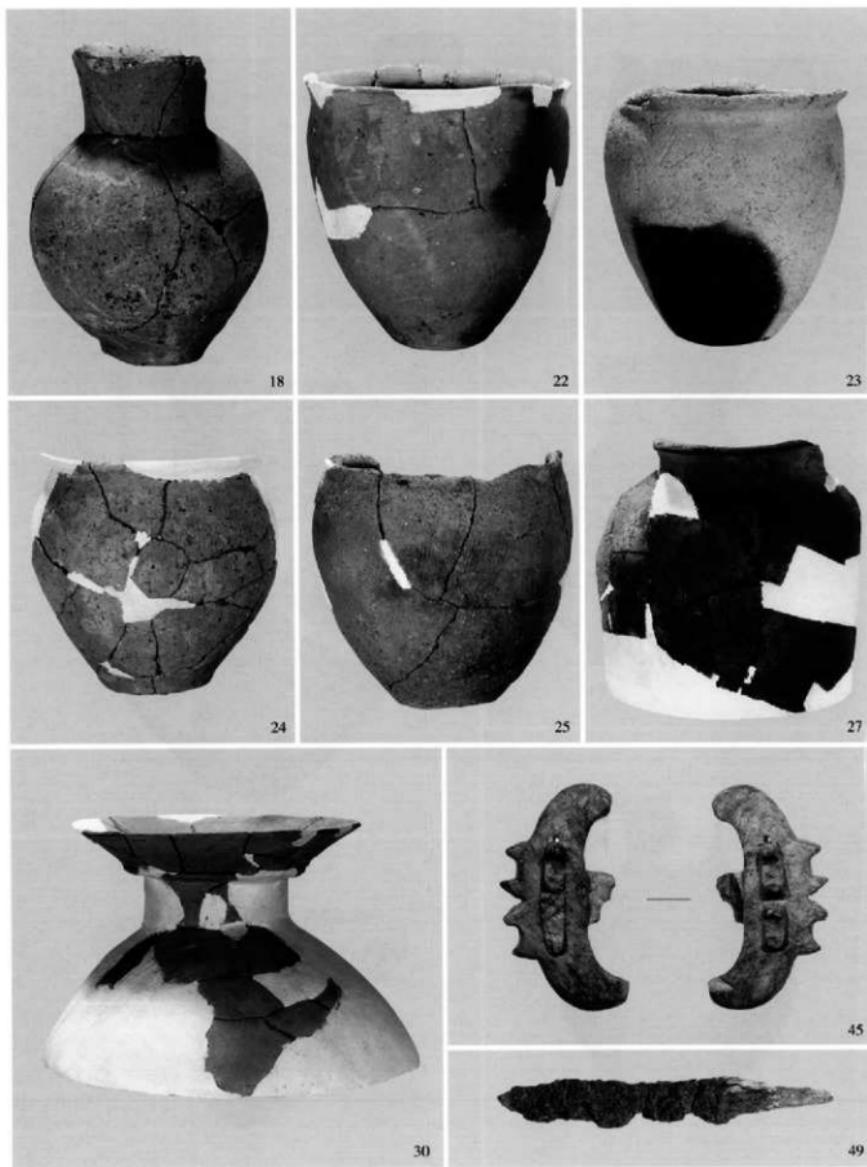
Ph.19 SX004(南から)



Ph.20 SX014(南から)



Ph.21 出土遺物(1)



Ph.22 出土遺物(2)

那珂遺跡群第74次調査



2001
福岡市教育委員会

例　　言

1. 本書は、博多区那珂1丁目423番・424番・426番地内における共同住宅建設工事に先立って、福岡市教育委員会が平成11年度（1999年度）に実施した那珂遺跡群第74次調査の発掘調査報告書である。
2. 本章の執筆・編集には本田浩二郎があたった。
3. 本章に使用した遺構実測図は本田・坂本真一が作成した。
また、製図には本田・山根ひろみがあたった。
4. 本書の遺構実測図中に用いていた方位は、すべて磁北である。
5. 本書に使用した遺物実測図は本田・山根・今村佳子・石井淳子が作成し、本田・今村が製図した。
遺物実測図の縮尺は土器類を1/3・1/4に統一し、石器を1/3、木器を1/6で統一した。
6. 検出した遺構については、調査時に検出順に通し番号を付した。
7. 遺物番号は通し番号とした。なお挿図中の遺物番号と写真中の遺物番号は一致する。
8. 本書で使用した写真は本田が撮影した。
9. 本調査に関する記録・遺物類は報告終了後、福岡市埋蔵文化財センターにおいて収蔵・管理・公開される予定であるので、活用されたい。

第一章 はじめに

1. 調査にいたる経緯

平成5年8月4日、広田一孝氏より福岡市教育委員会埋蔵文化財課に対して、福岡市博多区那珂1丁目423番、424番、426番内における共同住宅建設予定地内に関する埋蔵文化財事前審査願が提出された。申請地は周知の遺跡である那珂遺跡の北東部に位置しており、これを受けて埋蔵文化財課では平成5年8月24日に試掘調査を行った。その結果、現地表面から100~150cm程掘り下げる鳥糞ローム層上面において弥生時代から古代にかけての井戸、柱穴等の遺構と該期の遺物の存在を確認した。共同住宅建設に伴う基礎工事によって遺跡の破壊は免れないため、申請者と埋蔵文化財課は文化財保護に関する協議を行い、工事によって止むを得ず破壊される部分については発掘調査を行い、記録保存を図ることとなった。発掘調査は福岡市教育委員会埋蔵文化財課がこれを行うこととなり、平成11年12月20日に着手し、平成12年2月8日に終了した。

2. 調査体制

調査委託：広田 一孝氏

| | | | |
|-------|------------|--------------|-------------|
| 調査主体： | 福岡市教育委員会 | 教育長 | 西 恵一郎 |
| | | | 生田 征生 |
| 調査総括： | 同 | 埋蔵文化財課 課長 | 山崎 純男 |
| | 同 | 埋蔵文化財課 第2係長 | 力武 卓治 |
| 調査庶務： | 同 | 文化財整備課 | 谷口 真由美（前任） |
| | 同 | 文化財整備課 | 御手洗 清（現任） |
| 調査担当： | 同 | 埋蔵文化財課 事前審査係 | 加藤 隆也（試掘調査） |
| | | 第2係 | 本田 浩二郎（本調査） |
| 調査作業： | 岩本 三重子 | 牛島 靖 | 大賀 規矩雄 |
| | 近藤 澄江 | 坂本 真一 | 越智 信孝 |
| | 中村サツエ | 西山 徳子 | 木原 保生 |
| | 藤野 トシ子 | 村田 敬子 | 玉田 重人 |
| | 整理作業：今村 佳子 | 有島 美江 | 中村 フミ子 |
| | | 野副 けいこ | 平井 武夫 |
| | | | 藤野 幾志 |
| | | | 野飼 悅子 |
| | | | 室 以佐子 |

| | | | |
|--------|-----------------------|--------|-------------------|
| 遺跡調査番号 | 9961 | 遺跡略号 | NAK74 |
| 調査地地番 | 博多区那珂1丁目423・424・426 | 分布地図番号 | 23雀居 37東光寺 |
| 開発面積 | 598m ² | 調査面積 | 182m ² |
| 調査期間 | 1999年12月20日~2000年2月8日 | | |

なお、調査期間中には株式会社有澤建設の皆様からご協力を賜った。記して感謝する次第である。

第二章 発掘の記録

1. 調査の概要

那珂遺跡群は福岡平野の中央部に位置し、御笠川と那珂川に挟まれた洪積丘陵の北端に位置している。この丘陵は花崗岩風化礫層を基盤とし、阿蘇山の火碎流による八女粘土・鳥栖ローム層が上部に堆積し形成される。那珂遺跡群の北側には接するように比恵遺跡群が展開しており、これまでの調査成果より両遺跡は一連の遺跡として考えられている。那珂・比恵遺跡群の旧地形の標高は、これまでの調査成果から5~11m前後と考えられており、その分布範囲は南北2.4km×東西0.5~0.8kmが復元・推定されている。両遺跡群からは後期旧石器時代から中世にかけての遺構・遺物が検出され、特に弥生時代から古墳時代・古代にかけての時期は遺構が集中して検出される。那珂遺跡群では平成13年現在までに第77次、比恵遺跡群では第72次調査までが行われている。

今回報告を行う、第74次調査地点は那珂遺跡の北東側に位置しており、現地表面の標高は8m前後を測る。調査区は南北方向に長く、調査着手以前は中央部より北側が宅地、南側が駐車場であった。調査は排土を場内で処理する関係から南側をA区、北側をB区と二分割して設定し、南側のA区より着手した。試掘調査は既存建物解体以前にB区側で行われており、試掘調査を行っていないA区側でもB区同様に遺構が検出されることを予想して表土掘削を行ったが、表土掘削の結果、A区では近世以降の耕作地開発のため、八女粘土層面の標高6.30m前後（調査区で八女粘土層面は6.50m以下に堆積する）まで擾乱されており、一部の遺構を除いて消滅していた。八女粘土層上面には水田床土の黒褐色粘質土が厚さ20cm程度堆積し、近世まで耕作地として使用されていたと考えられる。水田が廃棄された後は戦後に宅地として埋め立てされるまで、調査区付近は沼地状の湿地帯であったことが分かっている。A区の八女粘土層面で検出した遺構は、中世以前のものと考えられる溝2条の底部分と現代の井戸2基である。

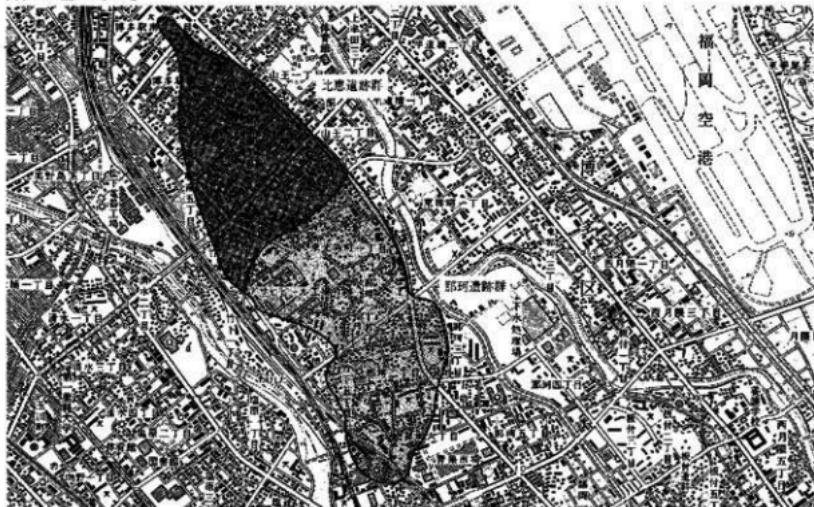


Fig. 1 遺跡分布位置図 (S=1/25000)

A区の調査終了後、排土反転作業とB区の表土掘削を行った。B区西側半分は、A区同様に八女粘土層まで開墾のために擾乱されていたため調査は断念した。残るB区東側では、部分的に鳥栖ローム層が検出され、その上面に遺構が存在していることが確認された。南北方向に帯状で検出された鳥栖ローム層面の東側は、弥生時代中期から後期に属する土器・石器などの遺物を大量に含む包含層が堆積していた。これにより残された調査区全面を、鳥栖ローム層上面まで重機によって検出することはあきらめ、包含層上面で遺構検出を行い、順次掘り下げていくこととした。包含層上面からは古代から中世にかけての井戸、戦時の防空壕などの遺構が検出された。包含層には東西方向の土層トレチを設定し堆積状況を観察した。その結果、検出された鳥栖ローム層面は人工的に掘削されたと考えられる幅20m程度の谷地形の西側肩部分に当たり、包含層は谷が埋没する際に形成された堆積層であることが判明した。包含層は大きく分けて二時期に分けられ、上層部分が弥生時代後期前半の遺物を大量に包含する黒褐色粘質土層、下層部分が弥生時代中期末の遺物を包含する黒色粘質土層である。これにより谷地形が埋没し始めた時期は、弥生時代中期後半の時期であることが推定される。包含層からはコンテナケース30箱以上の土器・石器などの遺物が出土した。谷は八女粘土層まで掘削されており、底面での標高は6.35m前後を測る。包含層を除去すると谷東側斜面上で包含層形成以前のものと考えられる遺構が検出された。削平の状況が著しく、遺構の残存は浅い。また、鳥栖ローム層面で平面形が不明瞭な土坑が検出された。埋土はローム層をブロック状に含む暗黄褐色土で、遺物の出土がなかった。縄文時代晚期頃の風倒木痕と考えられる。

B区で検出した遺構は弥生時代の井戸3基以上、柱穴多数（円形住居）、古代以前の落し穴遺構、古代の井戸2基、中世の井戸3基、現代の井戸2基、防空壕1基などである。遺物はコンテナケースで43箱分の弥生土器・土師器・須恵器・石器・木製品が出土した。



Fig. 2 第74次調査区位置図 (S=1/4000)

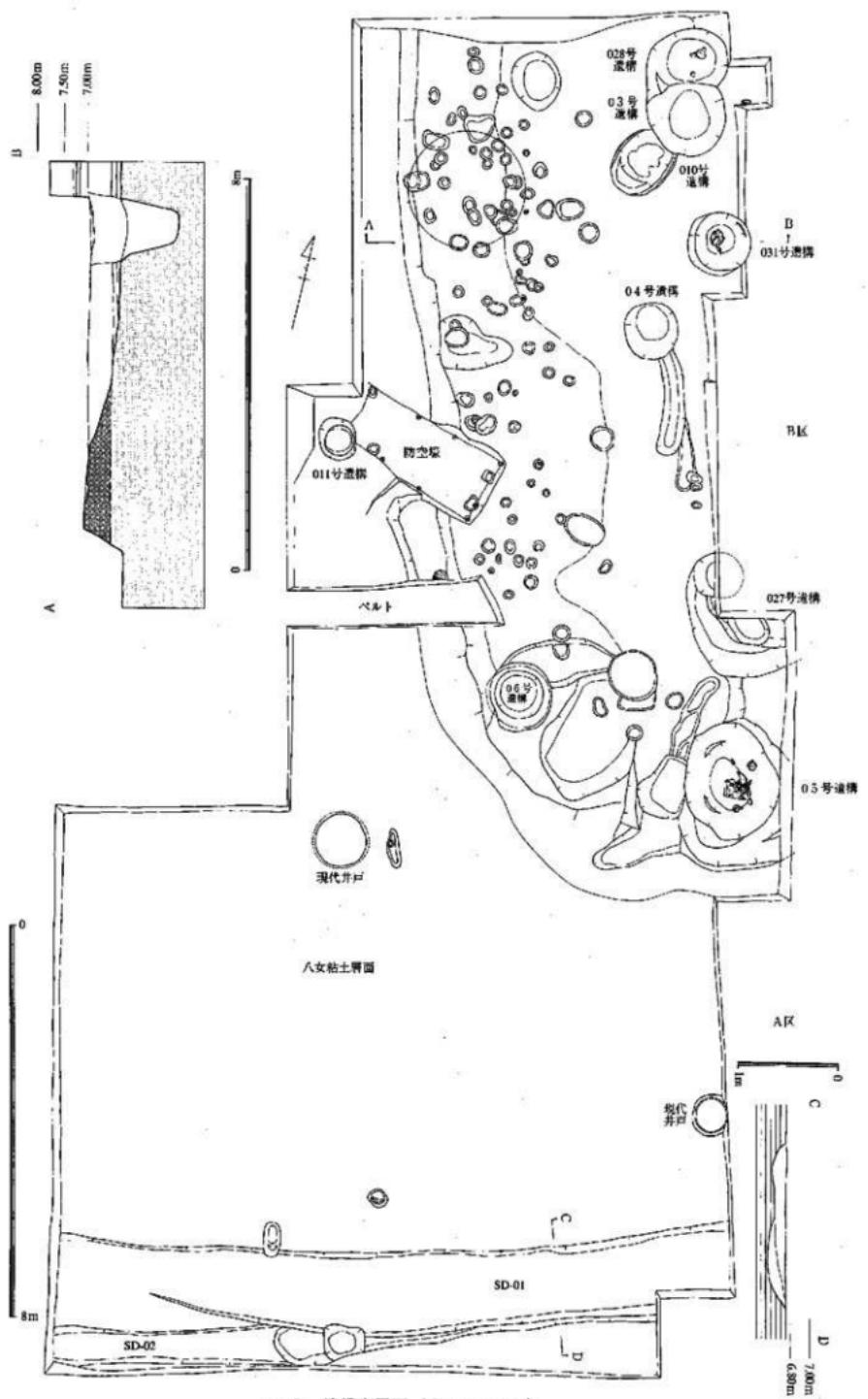


Fig. 3 遺構配置図 ($S=1/50.1/100$)

2. 遺構と遺物

A区では溝2条（SD-01・SD-02）の底部と現代の井戸2基を検出した。A区は前述のように八女粘土層まで擾乱されており、検出された溝以外の遺構は消滅していた。

SD-01 (Fig-3)

A区南端で検出された溝遺構である。現状で幅1.5m、検出面からの深さ10cm前後を測る。埋土は暗褐色粘質土で鳥栖ローム土をブロック状に含み、下層には粗砂が堆積する。主軸の方向は西南西より東北東方向を探る。遺物は、弥生土器・須恵器・土師器の小片と白磁碗の小片が少量出土したが、いずれも細片である。埋土・遺物より中世の時期が考えられる。

SD-02 (Fig-3)

A区南端で検出された溝遺構で、SD-01に切られる。現状で幅1m、検出面からの深さ20cm前後を測る。埋土は暗褐色粘質土で八女粘土がブロック状に混入する。SD-01の埋土より粘性が高い。主軸の方向はSD-01よりやや南に片寄る。遺物は弥生土器・土師器片が少量出土するが、埋没段階に混入したものと考えられ、遺構は中世の時期に属するものと考えられる。

B区では、西側半分が擾乱により遺構面自体が消滅しており、残存する東側で遺構が検出された。調査を行った部分のほとんどが谷の西側斜面に位置し、この谷を埋めるように弥生時代の包含層が堆積する。弥生時代に属する遺物の大半はこの包含層から出土したものである。

遺構は大別して弥生時代・古代・中世の三時期に分けられる。これより各時期ごとの遺構と遺物について報告を行う。



Ph. 1 A区全景（北から）



Ph. 2 001号・002号検出状況（東から）



Ph. 3 B区北側土層堆積状況（南から）



Ph. 4 B区全景（北から）

(一) 弥生時代の遺構と遺物

弥生時代に属する遺構は井戸遺構と柱穴群、人工的に掘削された谷と谷に堆積する包含層が検出された。谷遺構は土層堆積状況より中期後半以前に掘削され、中期後半の段階から埋没・遺物の投棄が開始され、後期の段階では完全に埋没していたものと考えられる。検出された柱穴群からは円形住居の存在も考えられたが、削平が激しく確認できなかった。

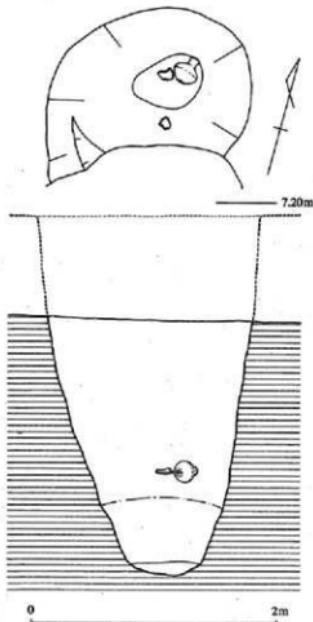


Fig. 4 028号遺構実測図 ($S = 1/40$)

028号遺構 (Fig-4)

B区北端部の包含層中層付近で検出した井戸遺構である。古代の井戸03号遺構により南側が切られる。平面形は椭円形を呈し、径 $1.65m \times 1.10m$ 以上を測り、検出面から底面までの深さは $2.10m$ 前後を測る。調査段階では掘方の一部が検出されてため、北側に拡張して全体を検出・掘り下げを行った。埋土は黒褐色粘質土で八女粘土がブロック状に混入する。検出面より $1.2m$ 掘り下げた地点で直口壺 (Fig-5-12) が出土した。また、直口壺とほぼ同じ高さの地点で $10cm$ 程度の網代の痕跡が検出された。出土遺物より弥生時代後期の時期が考えられる。

Fig-5 に出土遺物を示した。

1は壺の口縁部片である。2・13は器台である。2は口径 $5.7cm$ 、器高 $8.9cm$ を測る。3は二重口縁壺の口縁部片である。復元口径 $19.0cm$ を測り、色調は明褐色を呈する。4は壺の底部片である。平底で復元底径は $10.0cm$ を測る。5は壺の口縁部片である。6は無頸壺である。口径 $12.0cm$ 、底径 $6.6cm$ 、器高 $20.4cm$ を測る。7は壺の口縁部片である。8・9は小壺の胴部片である。10は小型の無頸壺である。口径 $9.0cm$ 、底径 $4.7cm$ 、器高 $9.5cm$ を測る。11は壺の胴部片である。12は高壺の脚部片である。14は壺の口縁部片である。



Ph. 5 028号遺構遺物出土状況 (南西から)



Ph. 6 028号遺構出土遺物 (Fig-5-6)

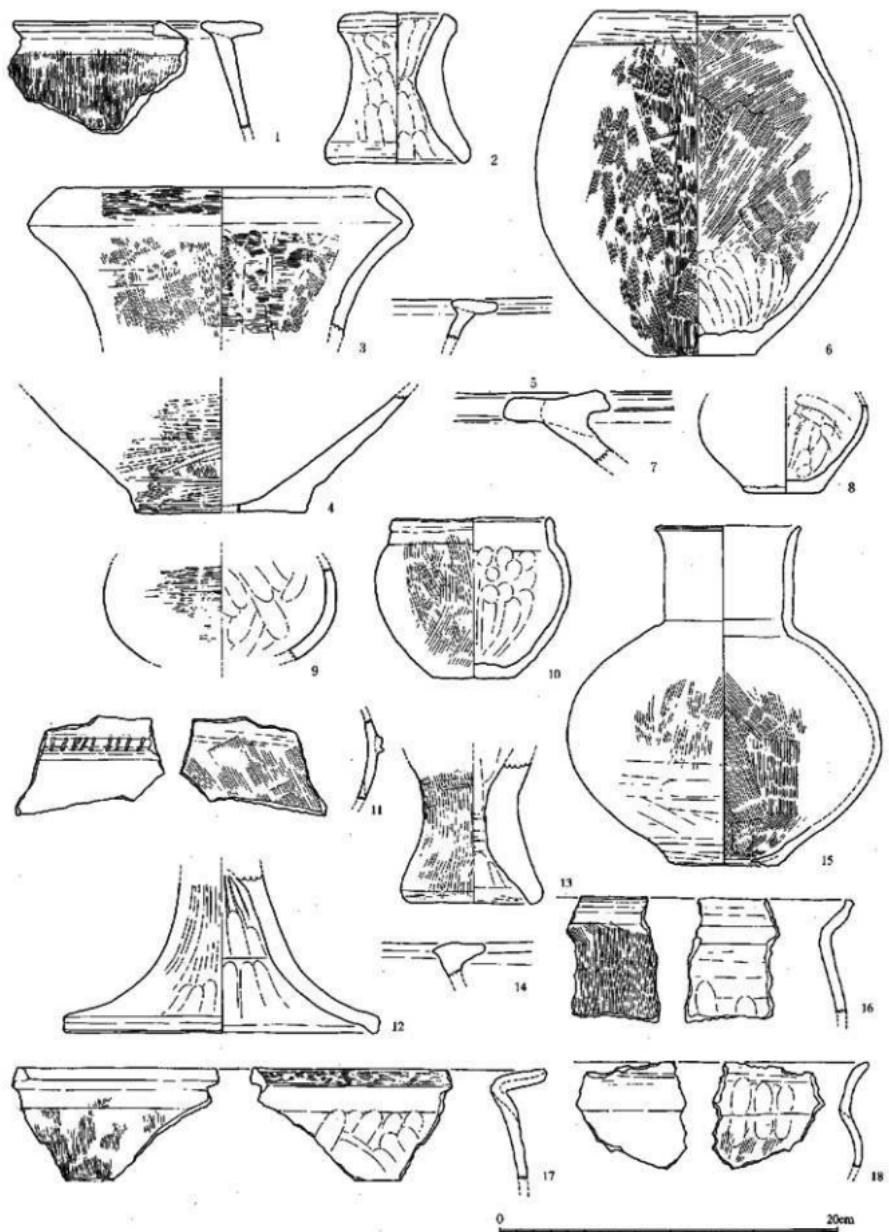


Fig. 5 出土遺物実測図 (S = 1/3)

15は直口壺である。口径8.4cm、底径6.8cm、器高20.2cmを測る。外器面上位は縦方向の刷毛目調整が施され、内器面には上方への刷毛目調整が明瞭に残る。底部には焼成後に穿孔が施される。色調は淡褐色を呈し、胴部下半部には黒斑が見られる。16・17は壺の口縁部片である。18は無頸壺の口縁部片である。

031号遺構 (Fig-6)

B区東側土層で確認した井戸遺構である。標高7.00m前後の包含層（黒褐色粘質土層面）上面から掘り込まれている。調査区では掘方の一部が検出されたであったため、東側に拡張して掘り下げを行った。平面形は円形で、直径1.3mを測る。検出した八女粘土層面から底面までの深さは1.5m前後を測り、包含層上面からは2.2mの深さを測る。埋土は遺物を大量に含む黒色粘質土で八女粘土をブロック状に含む。出土遺物より弥生時代後期の時期が考えられる。

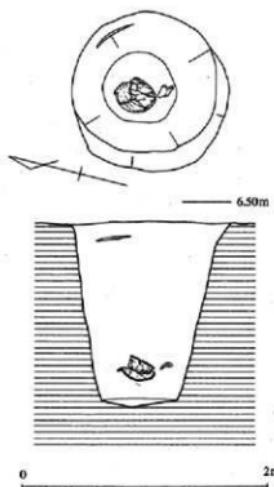


Fig. 6 031号遺構実測図 ($S=1/40$)

Fig-7 に出土遺物を示す。

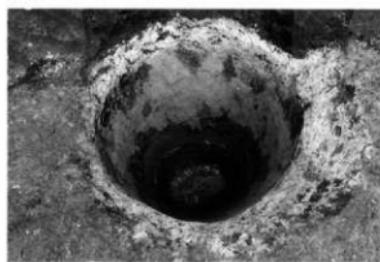
19は壺である。口径14.2cm、底径7.3cm、器高28.6cmを測る。底部は平底であるが、やや丸味を帯びる。色調は明褐色を呈し、胴部上半部に黒斑が観察できる。外器面には縦位～斜位の刷毛目調整、内器面には一回の単位が細かい刷毛目調整が施される。

包含層出土遺物 (Fig-7・Fig-8・Fig-9・Fig-10)

B区の半分以上を覆うように堆積する包含層からは30箱以上の遺物が出土した。遺物の多くが弥生時代中期後半から後期初頭のもので、この時期に谷が人为的に埋没され、包含層が形成されたことが分かる。

20は壺である。復元口径は19.4cmを測り、色調は褐色を呈する。21は小壺である。口径8.1cm、底径4.0cm、器高6.1cmを測る。焼成は良好で色調は褐色を呈する。22・23は蓋である。摘部を含めた上半部のみが残存する。

24・34は大型の器台である。同一個体と考えられる。外器面には赤色顔料が塗布される。25は高壺の壊部片である。26・29・30・32は高壺の脚部片である。



Ph. 7 031号遺構完掘状況 (西から)



Ph. 8 031号遺構遺物出土状況 (西から)

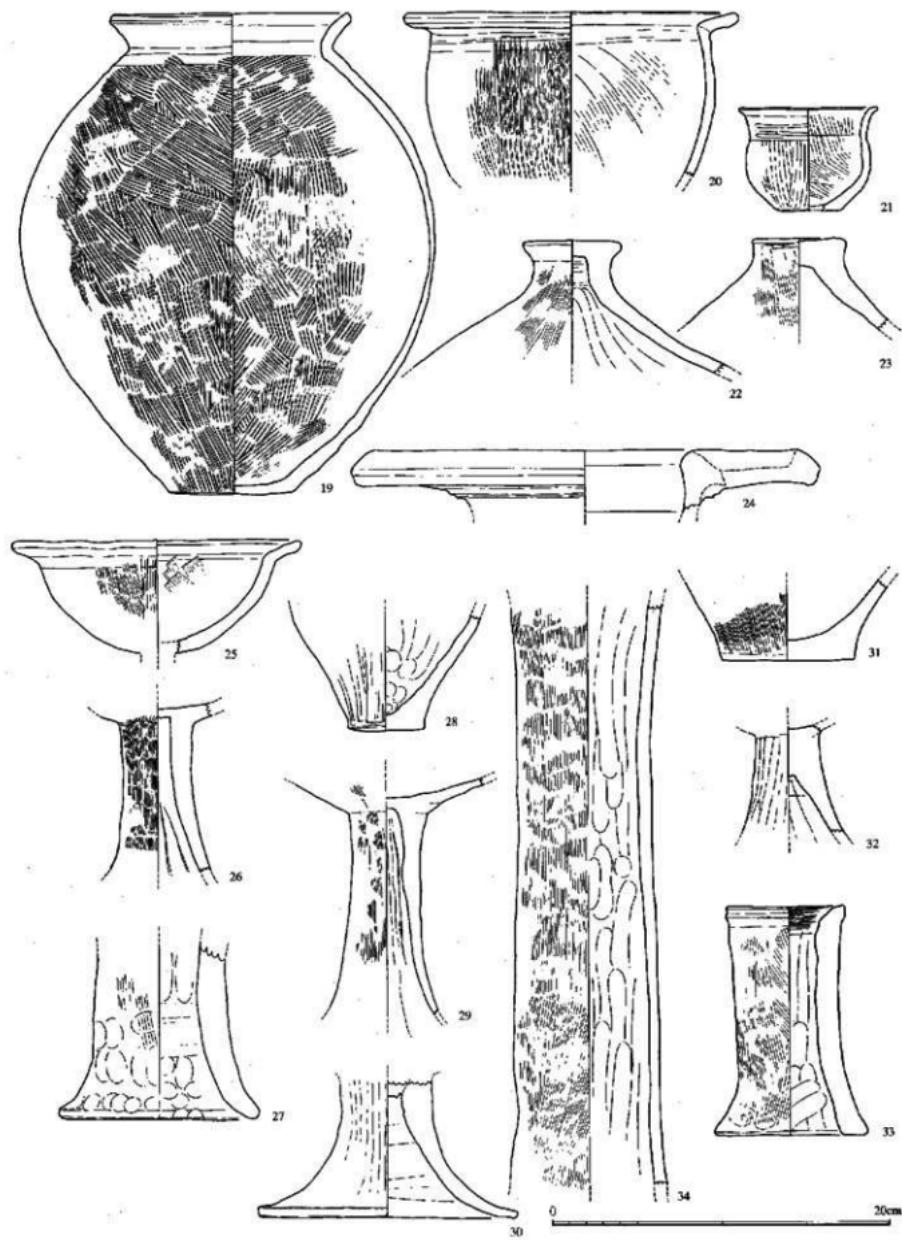


Fig. 7 出土遺物実測図 ($S = 1/3$)

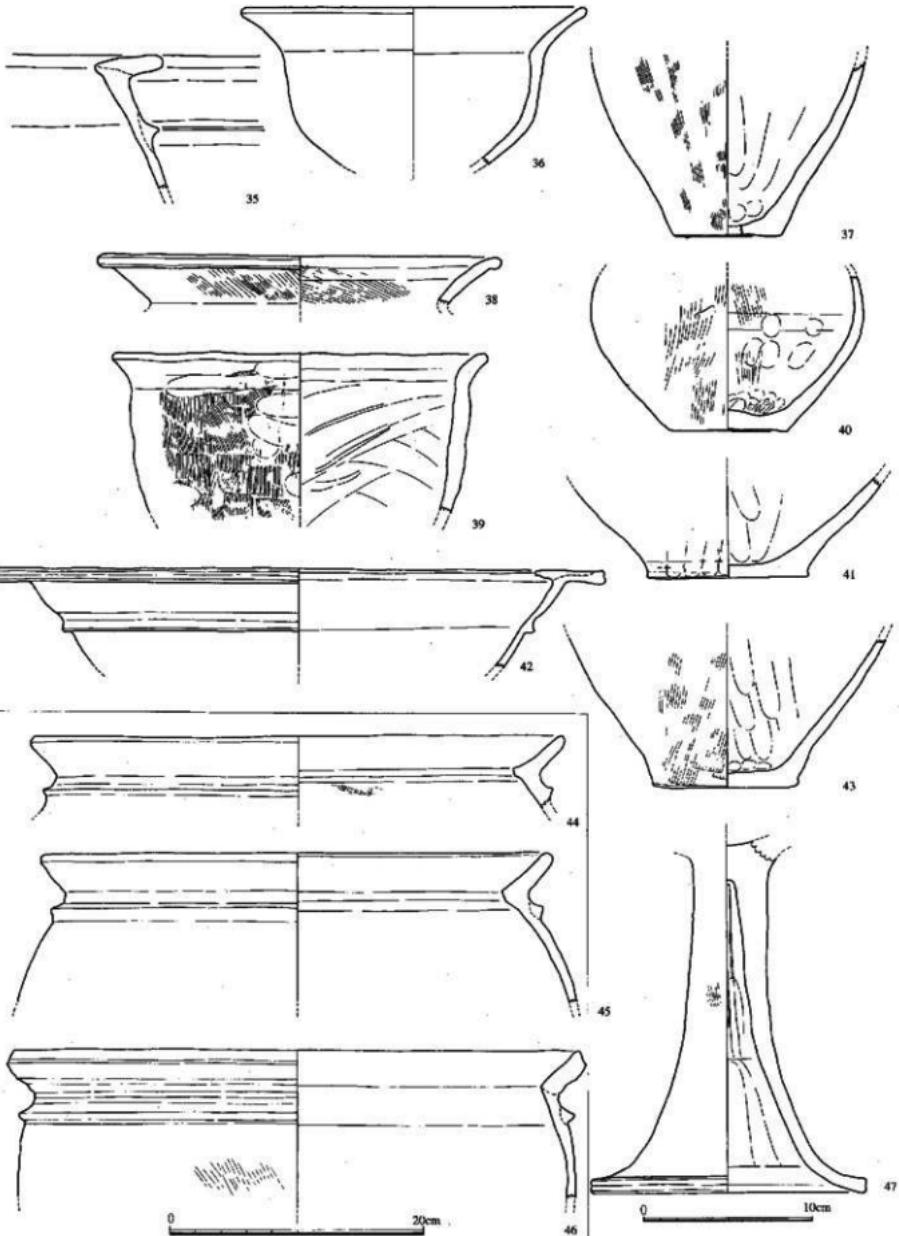


Fig. 8 出土遺物実測図 ($S = 1/3 \cdot 1/4$)

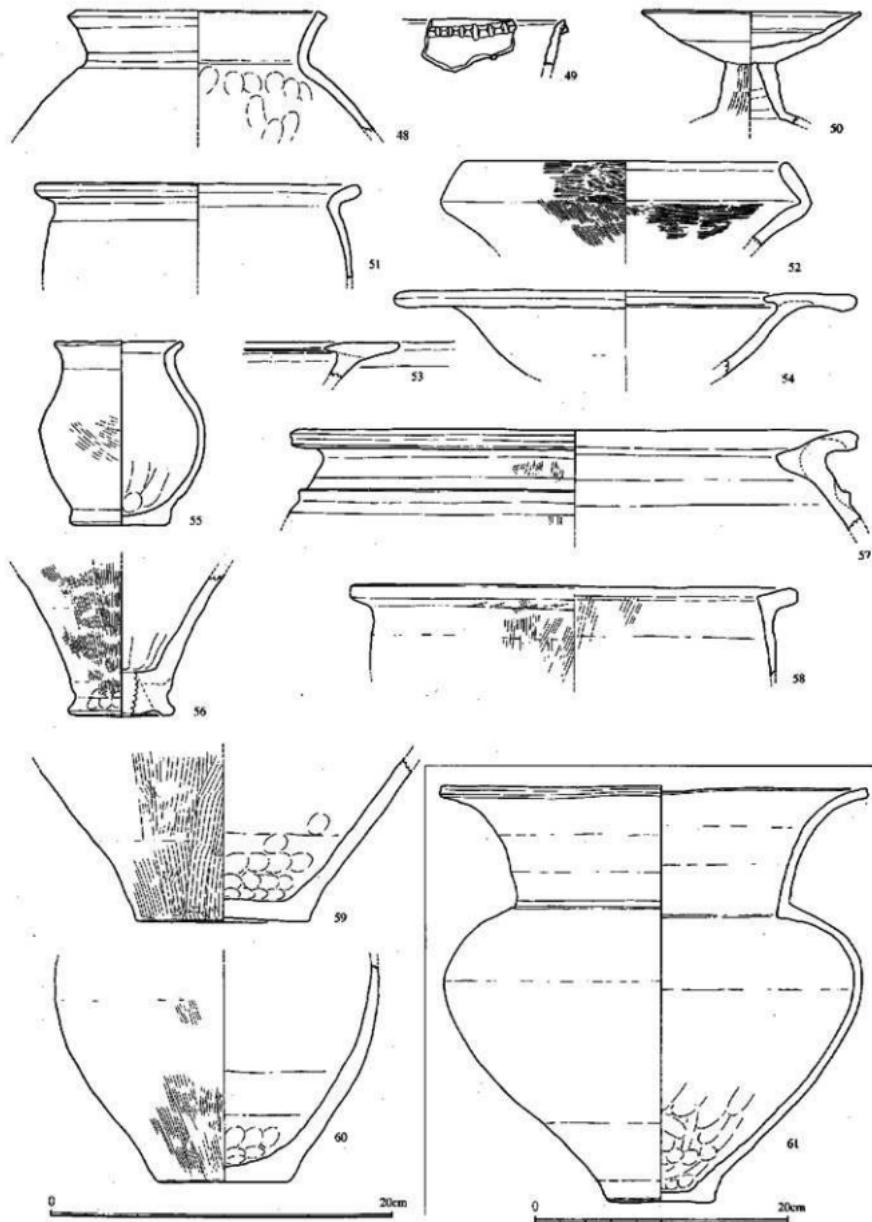


Fig. 9 出土遺物実測図 ($S = 1/3 \cdot 1/4$)

27は器台の下半部片である。復元底径は10.7cmを測り、内外器面とも指頭圧痕が明瞭に残る。28・31・37は臺の底部片である。28はやや丸味を帯びた平底を持ち、復元底径は4.4cmを測る。31・37は完全な平底で、復元底径は7.9cm・6.2cmを測る。33は器台である。器高は13.7cmを測り、色調は明褐色を呈する。35は大型臺の口縁部片である。36は鉢の口縁部片である。38・39は無頭臺の口縁部片である。復元口径は23.4cm・21.8cmを測る。40・41・43は臺の胴部片である。復元底径は7.0cm・9.4cm・8.6cmを測る。41・43は外底部付近に黒斑が見られる。42は高坏坏部口縁部片である。復元口径は35.8cmとかなり大型のものである。色調は明褐色で僅かにではあるが、赤色顔料が観察できる。44・45・46は大型の臺の口縁部片である。復元口径は41.8cm・39.6cm・44.6cmを測る。いずれも遺存状態



Ph. 9 B区東側土層遺物出土状況（西から）



Ph.10 B区東側土層出土遺物 (Fig. 9 - 61)

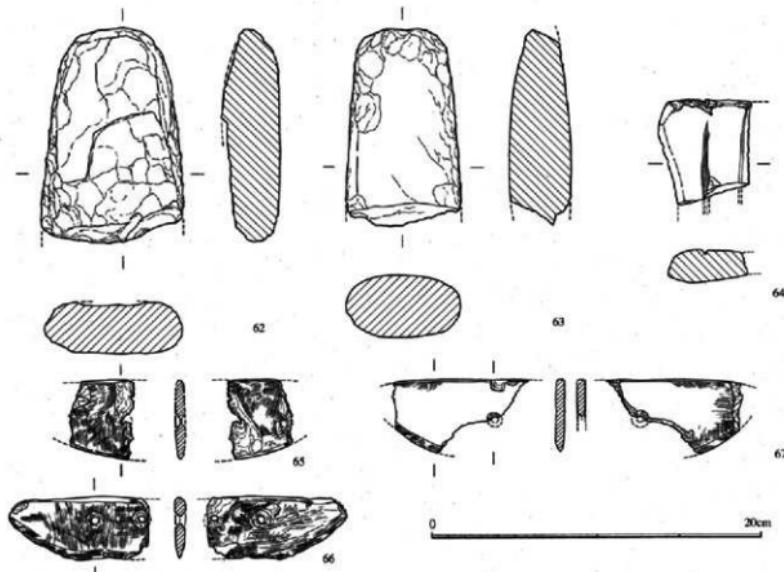


Fig.10 出土遺物実測図 (S = 1/3)

は悪く器面調整は観察できない。47は大型の高壊脚部片である。底径は21.0cmを測り、残存高は15.8cmを測る。色調は明褐色を呈する。48は壺の口縁部片である。復元口径は14.4cmを測る。器面調整は摩滅している。49は壺の口縁部片である。刻み目突蒂を持つ壺で、弥生前期に属するものである。50は古式土師器の高壊である。復元口径12.8cmを測り、残存高は6.6cmを測る。遺存状態は悪く、器面調整は摩滅している。51は壺の口縁部片である。52は二重口縁壺の口縁部片である。復元口径は19.2cmを測る。53・54は高壊部の口縁部片である。55は小壺である。56は壺の底部片である。57・58は壺の口縁部片である。59・60は壺の底部片である。61は東側土層下層から出土した広口壺である。口径33.6cm、底径8.2cm、器高33.2cmを測る。遺存状態は悪い。62・63は石斧である。62・63ともに刃部は欠損する。64は砥石である。欠損のため全体の形状は不明である。65・66・67は石包丁である。使用される石材は頁岩である。



Ph.11 出土遺物 (Fig-9-55)



Ph.12 出土遺物 (Fig-7-19)

(二) 古代の遺構と遺物

古代に属する遺構としては、井戸遺構二基と土坑数基が検出された。包含層上層からもこの時期の遺物が出土するが、検出できなかった遺構の遺物が包含されていたものと考えられる。

05号遺構 (Fig-11)

B区南東隅部で検出した井戸遺構である。検出した段階では西側半分だけが調査区内にかかる状態であったため、東側に拡張して掘り下げを行った。平面形は円形で長径2.4m×短径2.1mを測る。検出面から底面までの深さは1.8mを測り、土層断面で確認したところ標高7.00m付近から掘り込まれている。遺構構築時は深さ2.6m以上であったことが分かる。掘削の結果、井戸枠などは廃絶時に撤去され、痕跡も検出されなかった。埋土は黒色粘質土と八女粘土が交互に堆積しており、廃絶時に一気に埋め



Ph.13 05号遺構完堀状況（南西から）



Ph.14 05号遺構遺物出土状況（南から）

戻されたことが推測される。標高5.2m付近には土師器の製塩土器・須恵器蓋坏などが投棄されており、井戸底面の標高4.6m付近からは約60cm×40cmの木製扉の一部が検出された。遺物は土師器の壺・壺・瓶、須恵器の壺・蓋・高坏・塊などが出土した。

井戸遺構の西側には井戸を取り巻くように溝が廻り、南西側には井戸に向かって下るスロープ状の掘り込みが検出される。これらの遺構が井戸遺構に直接関係する遺構かどうかは今回の調査では判断できなかった。今後の類例の増加を期待したい。

Fig.12・Fig.13に出土遺物を示した。

68・69は土師器の壺である。復元口径はそれぞれ27.4cm・30.6cmを測る。70は手捏土器である。71は小壺である。70・71は弥生時代後期のもので05号遺構埋没時に混入したものと考えられる。70は口径4.8cm、底径4.0cm、器高4.0cmを測る。71は口縁部が欠損しているが、遺存状態は良好である。

72は製塩土器である。内外器面に明瞭に叩き痕が残り、外器面には煤が付着する。口径15.2cm、器高14.6cmを測る。焼成は良好で色調は暗褐色を呈する。口縁部下には煤が付着する。73は瓶である。74は壺の底部片か。75・76は壺の口縁部片である。77は竈型土器の焚き口部片である。色調は赤褐色を呈する。78は瓦質土器の鉢である。口径24.7cm、底径14.0cm、器高14.3cmを測る。焼成は良好で、色調は灰褐色を呈する。

79は壺の胴部片である。胴部下半部のみの出土で全体の形状は不明である。底面には不定方向の刷毛目調整が施される。

80は壺の胴部片である。底部はやや丸味を帯びた平底で、底径は18.0cmを測る。外器面には小単位

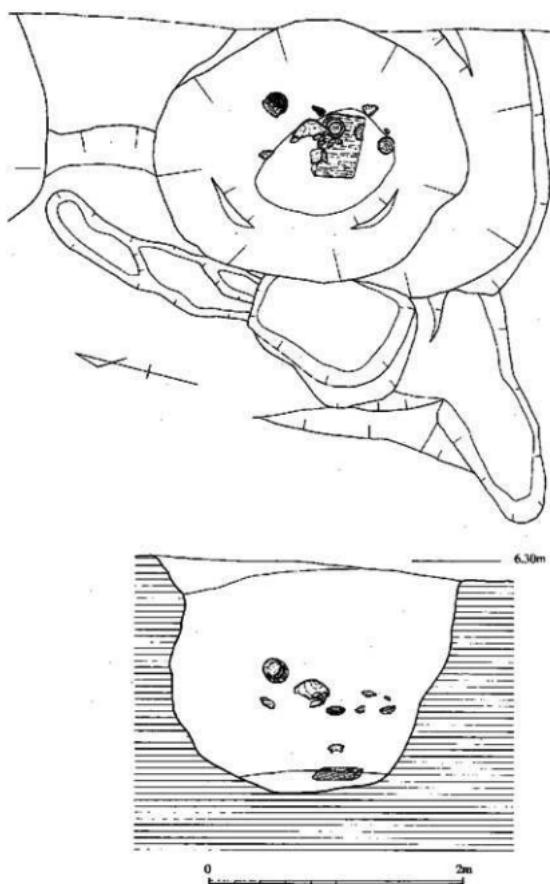


Fig.11 05号遺構実測図 (S=1/40)

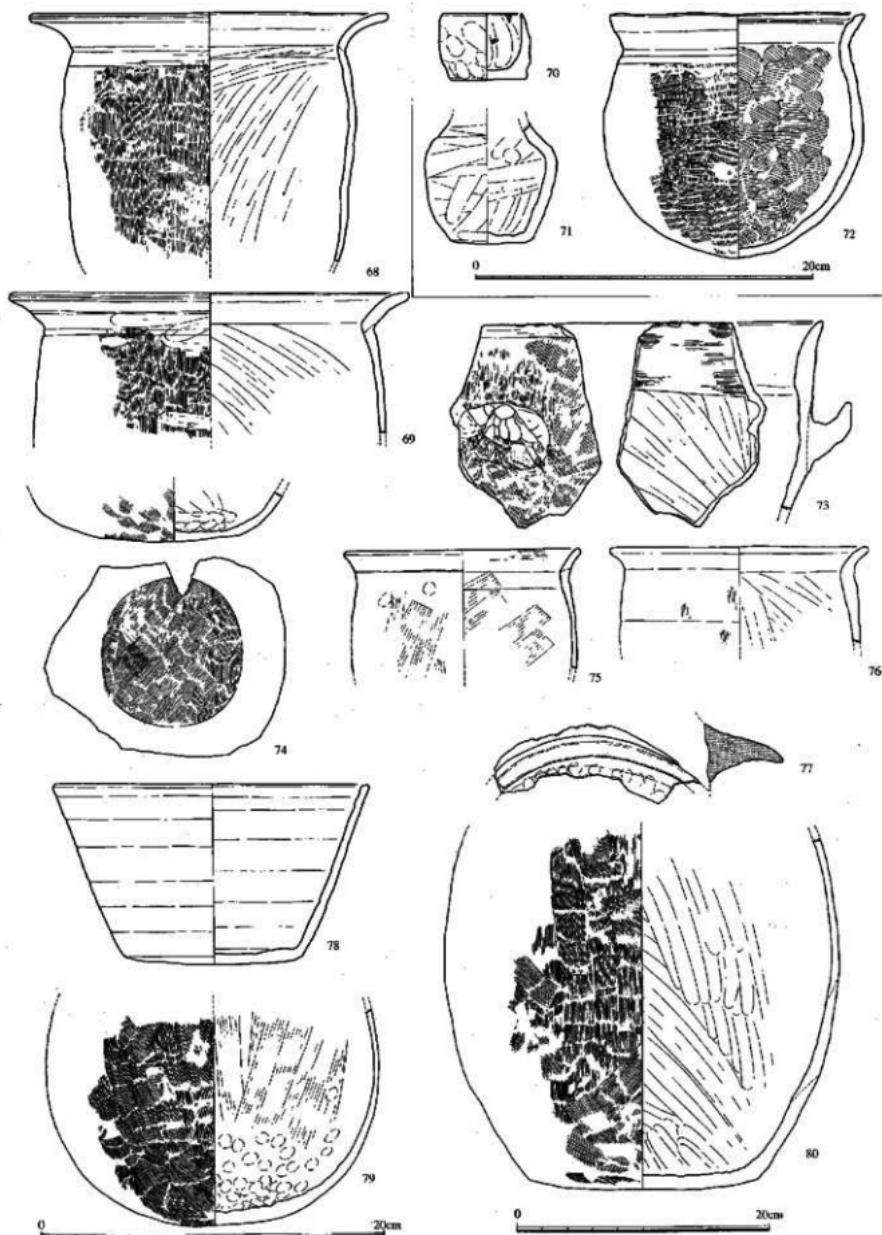


Fig.12 出土遺物実測図 (S=1/3・1/4)

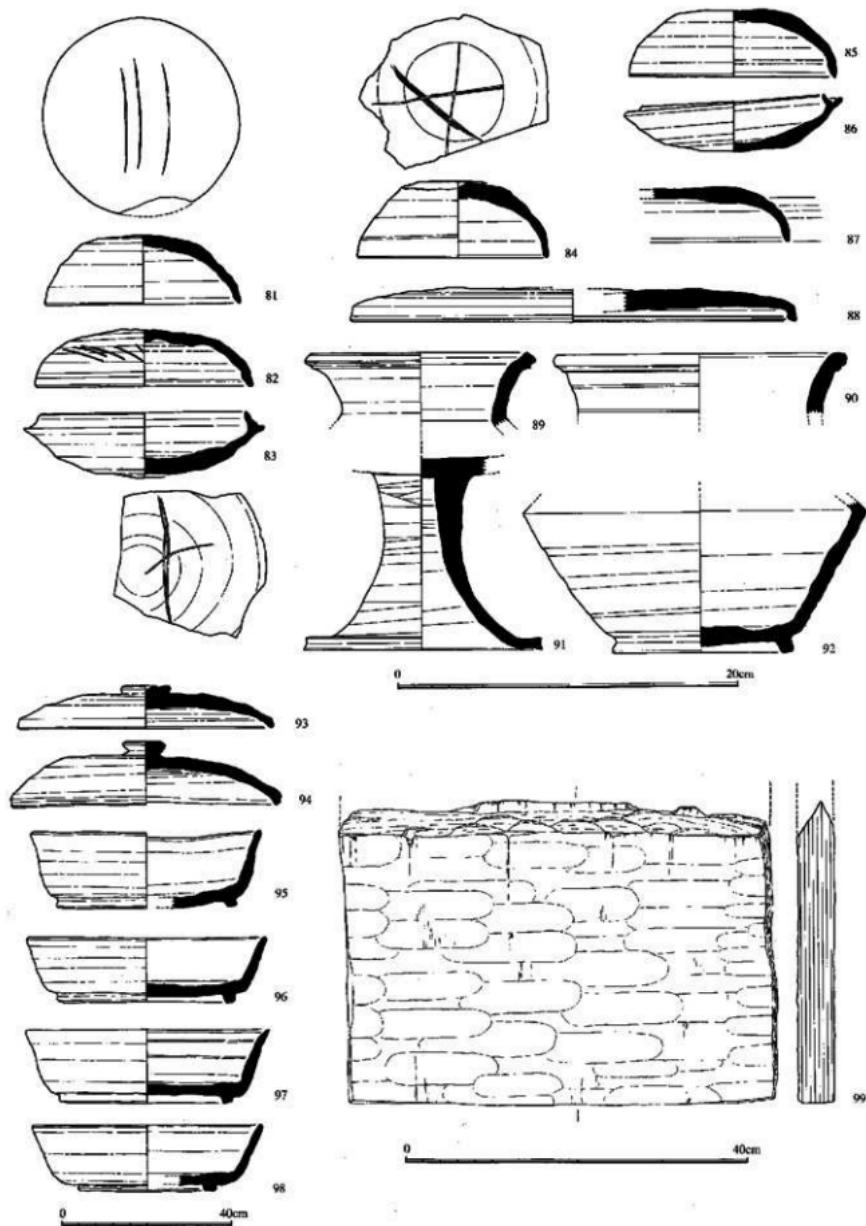


Fig.13 出土遺物実測図 (S = 1/3 · 1/6)

の刷毛目調整、内器面はヘラ削り調整が施される。

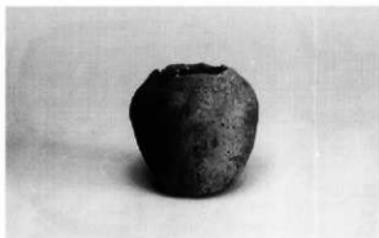
Fig-13-81・82・84・85・87は須恵器の蓋である。口径はそれぞれ11.4cm、12.8cm、11.1cm、12.0cm、12.7cmを測る。81・82・84・85の天井部にはヘラ記号が施される。焼成は85を除いて、いずれも良好で色調は灰色を呈する。85は焼成不良と考えられるが遺存状態は良好で、色調は茶褐色を呈する。85に施されたヘラ記号は鳥の足跡状である。83・86は須恵器壺である。口径は14.2cm、12.8cmを測る。83の底部には「×」状のヘラ記号が施される。88は須恵器蓋である。口縁部のみ残存する。復元口径は26.4cmを測る。89・90は須恵器の壺口縁部片である。復元口径は12.7cm、17.0cmを測る。ともに焼成良好で、色調は濃灰色を呈する。91は高坏の脚部片である。復元底径は14.0cmを測り、残存高は11.7cmを測る。92は高台付壺の胴部片である。高台径は10.6cmを測り、高台の断面形は方形を呈する。胴部最大径は20.4cmを測る。93・94は須恵器の蓋である。口径は14.8cm、15.6cmを測り、器高は2.5cm、3.8cmを測る。95・96・97・98は須恵器の壺である。口径はそれぞれ13.2cm、13.9cm、147.3cm、13.3cmを測り、高台は外底部附近に接合される。高台の断面形はいずれも方形を呈する。99は木製品である。扉材の一部と考えられ、鋸による加工痕が明瞭に残る。現状では50cm×36cm、厚さ4～5cmを測る。

100・101・102・103は壺の胴部片である。いずれも破片であり、色調は灰色を呈する。

出土遺物より6世紀末から7世紀初頭にかけて廃棄され8世紀後半の時期まで廃棄土坑として利用されていたことが考えられる。



Ph.15 05号遺構遺物出土状況（北から）



Ph.16 出土遺物 (Fig-12-70)



Ph.17 出土遺物 (Fig-12-71)



Ph.18 出土遺物 (Fig-13-85)



Ph.19 出土遺物 (Fig-13-86)

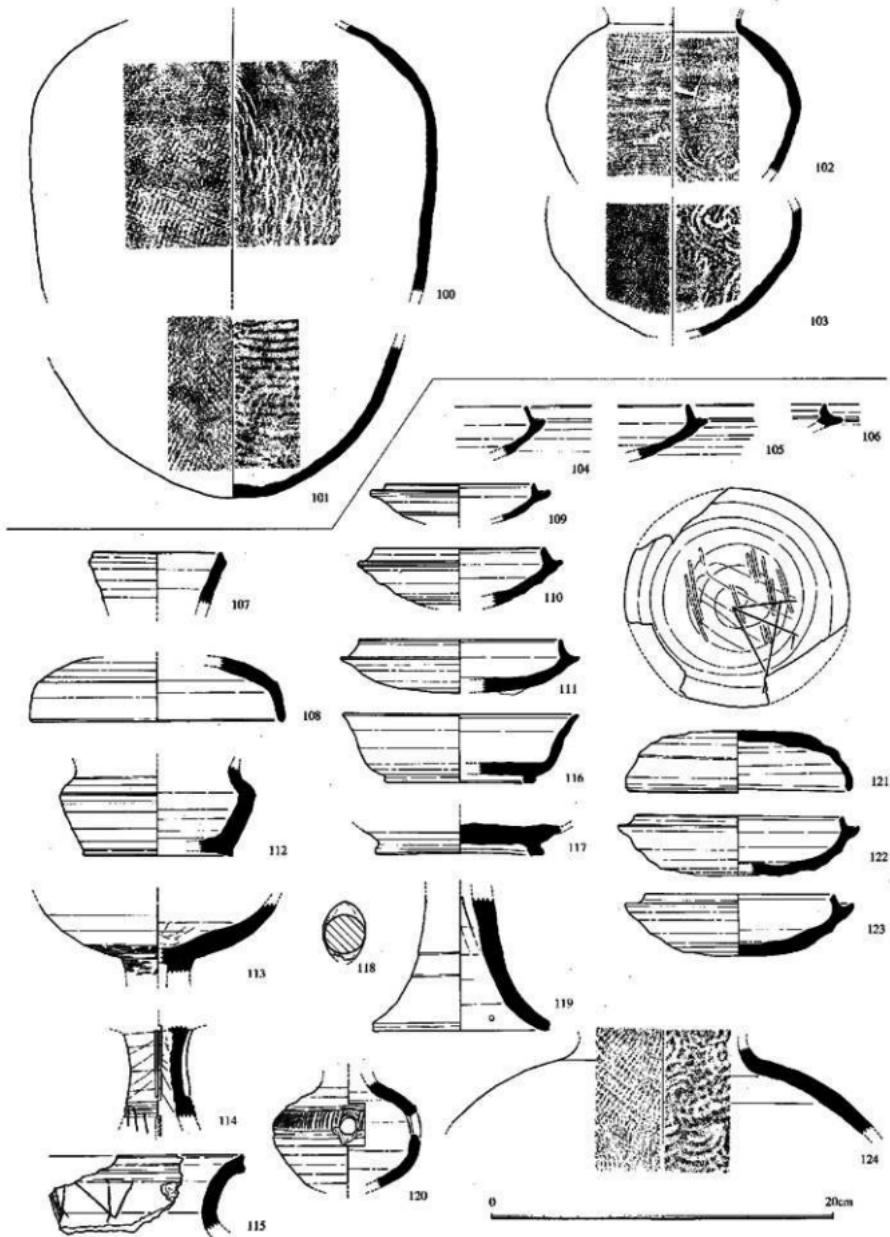


Fig.14 出上遺物実測図 (S = 1/3)

Fig-14の104～124迄の遺物は、包含層より出土した6世紀後半から7世紀初頭にかけての遺物と8世紀後半に属する遺物である。104・105・106は須恵器壺である。いずれも小片であるが、焼成は良好で、色調は濃灰色を呈する。107は壺の口縁部片である。口径は7.6cmを測り、色調は灰色を呈する。108は須恵器蓋である。復元径は14.8cmを測り、残存高は3.8cmを測る。摘部は欠損している。焼成は良好で色調は灰色を呈する。109・110・111は須恵器壺である。復元口径はそれぞれ、8.6cm、10.0cm、14.0cmを測る。焼成は良好で、色調は灰色～濃灰色を呈する。112は壺の底部片である。胸部最大径以下が残存する。胸部最大径は11.2cmを測り、復元底径は8.8cmを測る。113は高坏部片である。壺部と脚部の接合部のみの出土である。接合痕は丁寧なナデ調整が施される。脚基部の直径は4.4cmを測る。焼成は良好で、色調は灰色を呈する。114は高坏脚部片である。縦長の透し孔が刀子状の工具によって施され、透し孔下には二条の沈線が巡る。115は壺の口縁部片である。口縁部下に沈線文が施される。116・117は壺の底部片である。復元高台径は1.5cm、9.8cmを測る。高台の断面形は方形を呈する。いずれの高台も外底部付近に接合される。118は投弾である。長さ3.5cmを測る。119は高坏脚部片である。底径は10.2cmを測り、外器面には自然釉が付着する。120は縫である。頸部より上方に欠損する。胸部最大径は8.7cmを測る。121は須恵器蓋である。底径12.9cm、器高3.8cmを測り、天井部はヘラ削り調整され、鳥の足跡状のヘラ記号が施される。122・123は須恵器壺である。口径はそれぞれ14.2cm、13.4cmを測る。121と122はセットで出土した。いずれも焼成良好で、色調は灰色を呈する。124は須恵器壺の頸部片である。色調は焼成が甘いためか、赤褐色を呈する。

03号遺構 (Fig-15)

B区北端部で検出した井戸遺構である。平面形は上面では円形で、直径1.6m前後を測る。検出面から底面までの深さは2.3m前後を測る。底面は梢円形で、東側に向かって落ち込む。井戸枠などは検出されなかった。埋土は黒褐色粘質土で八女粘土をブロック状に含む。検出面から1m程度掘り下げた地点付近から土師器壺が数個体まとめて出土した。埋没段階で投棄されたものであろうか。出土遺物よりこの遺構は10世紀代に属するものと考えられる。

Fig-16に出土遺物を示した。

125～134は土師器壺である。125は口径15.6cm、

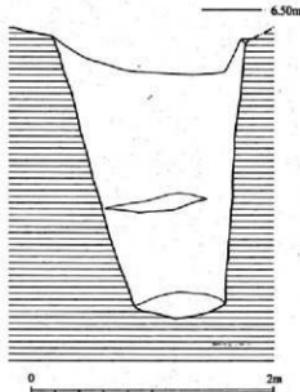
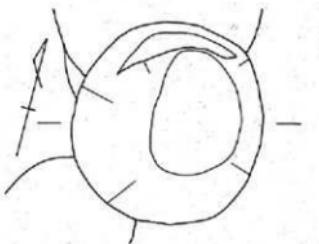


Fig.15 03号遺構実測図 (S = 1/40)



Ph.20 03号遺構完掘状況 (西から)

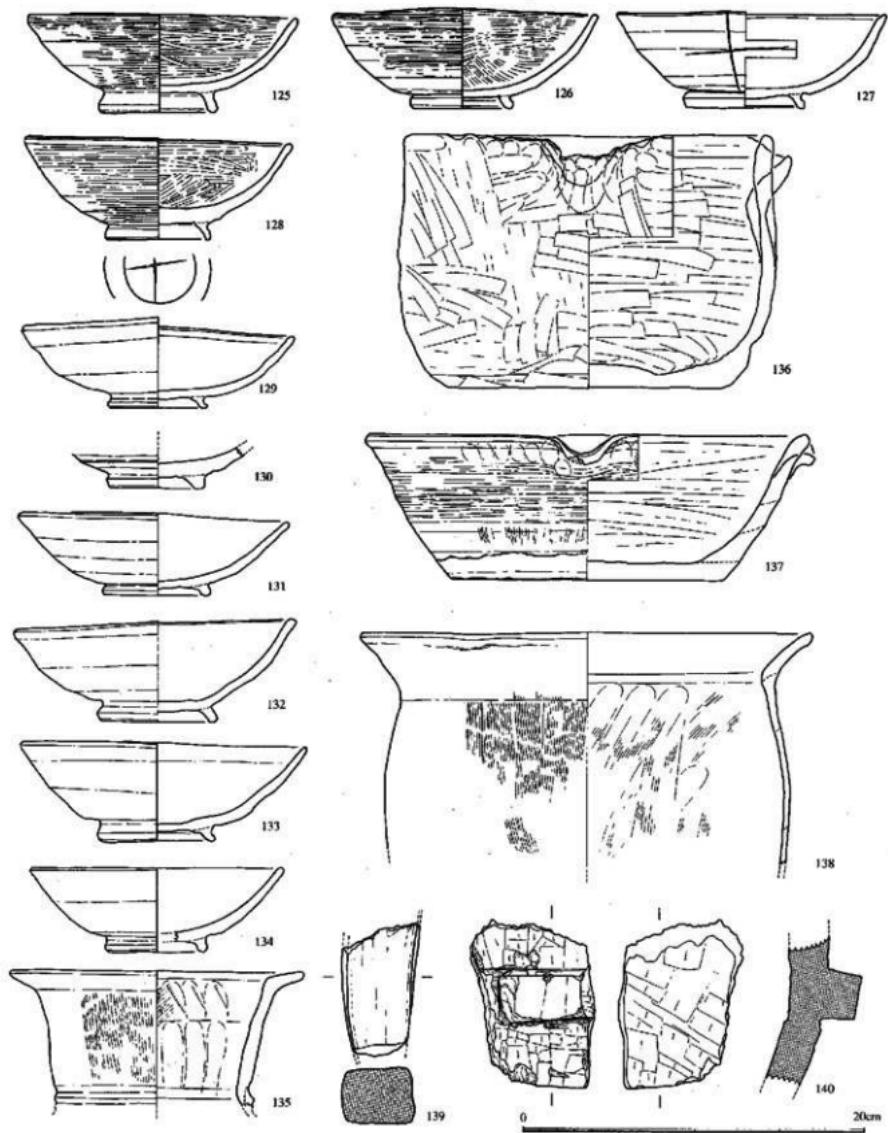


Fig.16 出土遺物実測図 (S = 1/3)

高台径6.7cm、器高5.8cmを測る。焼成は良好で、色調は褐色を呈する。外器面の一部は黒色を呈するが、炭素を吸着させたものではなく、埋土の汚れが付着したものである。外器面には横位のヘラ磨き痕が残り、内器面にも同様な横位のヘラ磨き痕が観察できる。126は口径15.4cm、高台径5.3cm、器高6.0cmを測る。焼成は良好で色調は褐色を呈する。調整はヘラ磨きが多用される。調整痕だけを見ると黒色土器の素体ともとれる。127は口径15.7cm、高台径6.9cm、器高5.7cmを測る。外器面には「×」状のヘラ記号が施される。焼成は良好で色調は褐色を呈する。器面調整はナデ調整のみが観察できる。128は口径15.5cm、高台径6.0cm、器高6.1cmを測る。高台内に「×」状のヘラ記号を持つ。高台の断面形は長方形を呈する。外器面は横位のヘラ磨き痕、内器面には上位で横位のヘラ磨き、見込み付近では斜交するヘラ磨きが施される。焼成は良好で色調は淡褐色を呈する。129は口径15.9cm、高台径5.4cm、器高5.8cmを測る。焼成は良好で色調は褐色を呈する。130は高台部のみの残存である。高台径は5.0cmを測り、高台の断面形は台形を呈する。焼成は良好で、色調は灰褐色を呈する。131は口径15.9cm、高台径6.3cm、器高4.9cmを測る。高台の断面形は半円形を呈し、外底部に接合される。焼成は良好で、色調は淡褐色を呈する。132は口径16.8cm、高台径6.5cm、器高6.2cmを測る。高台の断面形は方形を呈する。内底部は他の塊と異なり、平坦な面を持つ。器面調整はナデ調整だけが観察できる。焼成は良好で色調は淡褐色を呈する。133は口径16.7cm、高台径6.7cm、器高5.9cmを測る。外底部付近には明確な屈曲がある。器面調整はナデ調整のみが観察される。焼成は良好で、色調は淡褐色を呈する。高台の断面形は台形で、屈曲部より内面に接合される。134は復元口径14.6cm、高台径5.6cm、器高5.0cmを測る。高台の断面形は台形を呈する。焼成は良好で色調は淡褐色を呈する。135は壺の口縁部片である。復元口径17.2cmを測り、口縁端部は大きく外反する。頭部上には沈線が巡る。外器面には縱位の刷毛目調整、内器面には指ナデ調整と斜位の刷毛目調整が施される。焼成はやや甘く、色調は明褐色を呈する。136は瓦質土器の片口鉢である。口径20.8cm、器高15.0cmを測る。内外器面ともヘラナデ調整が施され、片口部付近には指頭圧痕が観察される。焼成は良好で、色調は外器面では黒褐色～暗褐色、内器面では黒灰色を呈する。底部はヘラ削り調整で整形されている。137も瓦質土器の片口鉢である。復元口径25.6cm、底径16.4cm、器高8.7cmを測る。外器面は縱位の刷毛目調整の後、横位のナデ調整が施される。内器面には不定方向のナデ調整が施されている。片口部付近は指押さえで成形され、指頭圧痕が観察できる。焼成はやや甘く色調は黒灰色から灰白色を呈する。138は壺である。口径26.4cmを測る。色調は褐色を呈し、刷毛目調整・ナデ調整が観察できる。139は土製の支脚である。残存高は7.9cm前後を測る。色調は褐色を呈するが、所々被熱のため赤色化する。140は滑石製の石鍋片である。内外面ともに調整痕が明瞭に観察できる。

本調査地点では、古墳時代末から古代にかけての遺物は以上のように数多く出土しているが、この時期の遺構の検出は少なく、後世に削平・擾乱されたものと考えられる。



Ph.21 出土遺物 (Fig-16-128)



Ph.22 出土遺物 (Fig-16-126)

(三) 中世の遺構と遺物

本調査地点では、中世に属する遺構として井戸遺構三基と土坑数基のみが検出された。調査区の大半が中世以降の削平を受けて、遺構の大部分が消滅していたためである。近接する調査区では該期の遺構も比較的濃密に検出されていることから、削平を受けていなければより多くの遺構が検出されたものと考えられる。

04号遺構 (Fig-17)

B区中央部東側で検出した井戸遺構である。平面形は円形で、直径は1.1m前後を測り、検出面（標高6.4m付近の八女粘土層面）から底面までの深さは2.4mを測る。井筒などの検出はなかった。遺物は弥生土器・土師器・須恵器・国産陶器などが出土した。いずれも細片である。出土遺物より中世に属するものと考えられる。

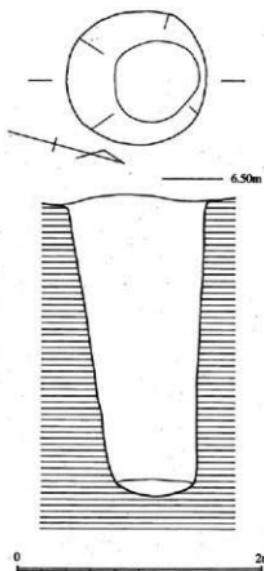


Fig.17 04号遺構実測図 ($S = 1/40$)



Ph.23 04号遺構完掘状況 (北から)

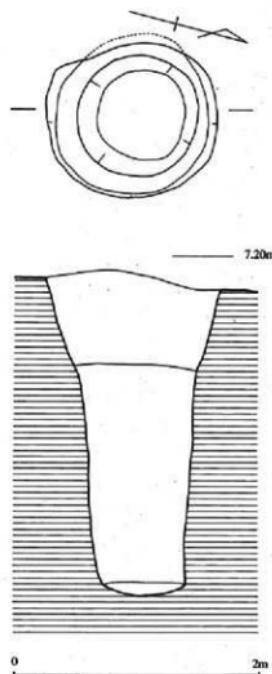
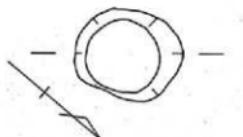


Fig.18 06号遺構実測図 ($S = 1/40$)

06号遺構 (Fig-18)

B区南側で検出した井戸遺構である。平面形は円形で直径は1.2~1.4mを測る。検出面から底面までの深さ2.4mを測る。井筒等の検出はなかった。出土遺物は白磁碗底部片一点だけである。出土遺物より11世紀から12世紀代の年代が考えられる。



011号遺構 (Fig-19)

B区西側の八女粘土層面で検出した井戸遺構である。平面形は円形で、直径90cm前後を測る。上部は削平のため消滅している。検出面から底面までの深さは1.2mを測る。出土遺物は土師器・須恵器・国産陶器などがある。14世紀代の遺構と考えられる。

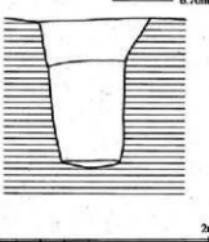


Fig-20に包含層より出土した中世に属する遺物を示した。

Fig.19 011号遺構実測図 (S=1/40)

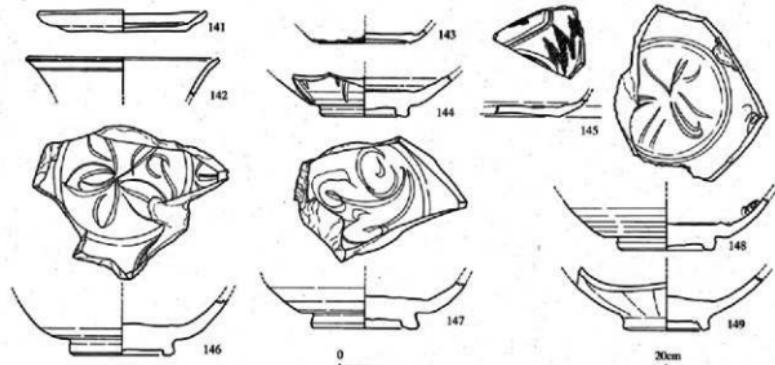


Fig.20 出土遺物実測図 (S=1/3)



Ph.24 06号遺構完掘状況 (東から)



Ph.25 011号遺構完掘状況 (南から)

Fig-141は土師器皿である。口径は10.0cm、底径は7.1cm、器高は1.3cmを測る。底部はヘラ切りされ、ナデ調整が加えられる。142は白磁碗である。口縁部の釉をふき取る口ハゲ碗である。143は白磁皿である。復元底径は5.6cmを測る。144は青磁碗である。いわゆる龍泉窯系青磁器である。高台径は5.4cmを測る。外器面には片切影で鑄連弁が施される。145は同安窯系青磁皿である。見込みには描描文が施される。146は龍泉窯系青磁碗である。内面見込みには片切影で文様が施される。147は龍泉窯系青磁碗である。高台径は6.5cmを測る。内面見込みには片切影で文様を施す。148は龍泉窯系青磁碗である。高台径は5.9cmを測る。149も龍泉窯系青磁碗である。高台径は5.3cmを測る。これらの出土遺物の年代は13世紀から14世紀代が考えられるが、本調査地点における該期の遺構は検出数に乏しい。

第三章 まとめ

以上、簡単ではあるが第74次調査の概要について述べてきた。最後に簡単なまとめを行いたい。第74次調査地点での遺構の初現は、弥生時代中期以前（前期中頃以降）に掘削されたと考えられる谷と、その中に堆積する遺物包含層である。調査区内では、西側の肩の一部が検出されただけであるため、その全容を知ることはできなかった。この谷は平坦な底面を持ち、その底面には流水などの痕跡はわずかにしか観察できない。また、谷は土層観察からも、ほぼ水平堆積する鳥居ローム層・八女粘土層を掘り抜いて掘削されていることがわかり、その法面も直線的で人工的である。

調査区東側は、現在の道路を挟んで周辺より50cm程高い微高地状の地形をなしており、この地形が谷の反対側（東側）の肩を反映しているものと考えられる。周辺の地形・調査成果から埋没した谷の全幅を推定すると、約10m程度のものと考えられる。調査区の東側を北西～南東方向へ走る現在の道路（谷の埋没地形）は、調査区北側200mの地点では切り通しになっており、この谷地形は計画的に掘削された何らかの施設であったことが考えられる。

次に遺構が見られるのは、弥生時代後期であるが、この時期の井戸遺構はすべて谷に堆積する包含層上面から掘削され、八女粘土層まで掘り抜いた形で検出されており、地下水を多く含む埋没地形を熟知した上での設置・掘削作業と考えられる。

古墳時代後期の時期には、調査区付近一帯は居住地として利用されていたと推定される。第74次調査地点の西側丘陵部分では、この時期の大型掘立柱建物などの施設が多数検出されており、本調査区はこの居住区の東側縁部分に相当していたと考えられる。弥生時代の谷地形はすでに埋没していたが、周辺より一段低い窪地として残存しており、ここに05号遺構などの井戸遺構が構築されたのであろう。05号井戸遺構は、井筒などの検出はなかったが、その規模・付随施設・出土遺物からも一般的なものとは異なっている。

本調査区では、調査対象面積のうちの実に半分以上が、近世以降に行われた地下げによって擾乱され、遺構は消滅していたが、残された調査区からは周辺の古地形を復元する上で重要な資料を得ることができた。断片的な資料ではあるが、今後の調査で遺跡全容の解明が行われることに期待したい。

那珂 28

-那珂蓮華郡第70次・74次調査概要-
福岡市埋蔵文化財発掘調査報告書第673集

2001年3月30日発行

発行 福岡市教育委員会
印刷 勝人里印刷センター

